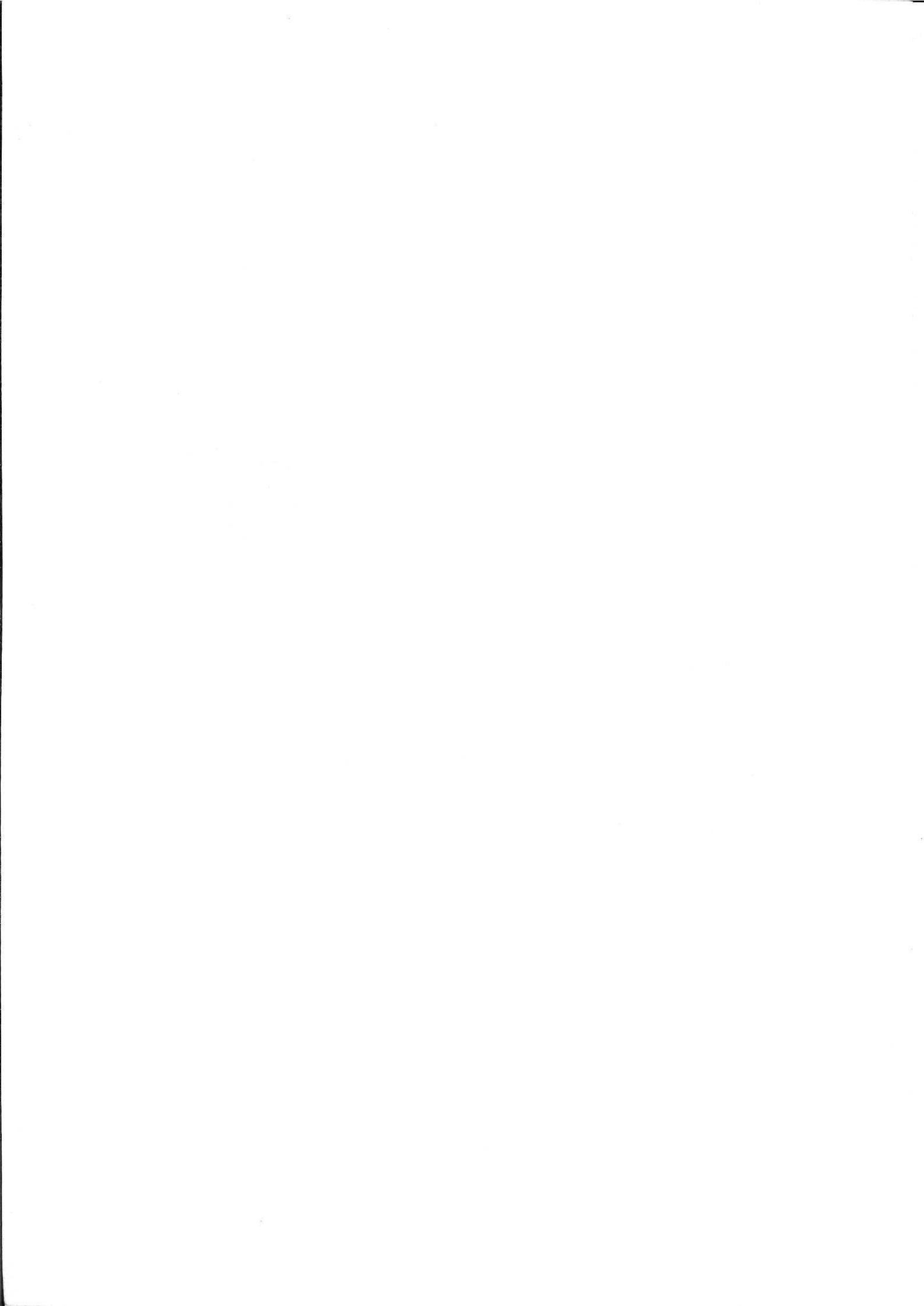


「四谷の町を基盤とした地域協働学校の構築」

～学校と保護者・地域の双方向から子どもの確かな学びと育ちをはぐくむ～



平成21年10月15日
新宿区立四谷中学校



あ い さ つ

新宿区教育委員会教育長

石 崎 洋 子

新宿区立四谷中学校は、平成20・21年度新宿区地域協働学校推進モデル校及び新宿区教育委員会研究発表校として、「四谷の町を基盤とした地域協働学校の構築 ～学校と保護者・地域の双方向から子どもの確かな学びと育ちをはぐくむ～」を研究主題に研究を進めてこられました。

ここにその研究の成果をまとめられましたことは大変喜ばしいことであり、谷合明雄 校長先生をはじめ教職員の皆様、並びに四谷中学校学校運営協議会の委員の皆様の御努力に対し深く敬意を表するとともに心よりお礼申し上げます。

国の推進するコミュニティ・スクールとは、学校・家庭・地域が一体となってよりよい教育の実現を目指すための、地域に開かれ、地域に支えられる学校づくりのしくみです。そこには、保護者や地域住民が一定の権限と責任をもって学校運営に参画することが要件として示されています。平成21年4月では、全国で478校となりました。

教育委員会でも、地域と協働する学校づくりが重要であるとの認識のもと、本年3月に策定した「新宿区教育ビジョン」の中に「地域協働学校（コミュニティ・スクール）の推進」を重要施策の1つとして示しました。具体的には、コミュニティ・スクールの趣旨を踏まえた地域と協働する学校の在り方を検討するための地域協働学校推進事業を立ち上げ、その中で四谷中学校をモデル校に指定しています。

四谷中学校では、すでに平成18・19年度に文部科学省のコミュニティ・スクール推進事業調査研究校として、地域の人材の活用、地域の教材化に取り組み、地域の学習拠点として地域と協働する地域協働学校としての研究成果を発表しています。今回の研究では、学校運営協議会の在り方の検討等、協議会全体での研究とともに、連携、支援、学校評価検討の実動組織分科会を設けて実践研究に取り組みされました。

放課後の基礎学力の向上の取り組み等にかかわる支援では、昨年度、年間延べ1100人を超える保護者や地域の方がボランティアとしてかかわっていただきました。生徒の地域ボランティアや職場体験等にかかわる連携では、「四谷中に通う子はすべて四谷の子ども」として受け止め、地域で子どもを育てるという意識改革の要として地域に働きかけ、地元の受け入れ事業所数を拡大するなどの成果を上げました。また、学校評価の検討では、第三者評価を含めた新たな学校評価の在り方について具体的な研究に取り組みされました。中でも、特筆すべきは、学校運営協議会委員の参画意識の向上です。その背景には、継続的な学校運営協議会の開催による学校の課題についての把握・共有と当事者意識の醸成があったと伺っており、このような学校の連携・支援組織としての参画意識の向上と持続が地域協働学校づくりの最も重要な鍵となると確信しました。

教育委員会としては、四谷中学校の成果を踏まえ、新宿区における地域協働学校の在り方を検討しており、今後は規則の整備等を行い、順次指定校を増やしていく予定です。

各学校におかれましては、地域の実態等を踏まえながら四谷中学校の成果を今後の教育活動に生かしていただくことを念願しています。

終わりになりましたが、本校の研究を進めるに当たり、専門的な立場から懇切丁寧な御指導を賜りました国立教育政策研究所教育政策・評価研究部部长 葉養正明 先生に厚く御礼申し上げます。また、子どもの成長を願い、御理解と御協力を賜りました保護者及び地域の皆様にも併せて感謝申し上げます、あいさつといたします。

あ い さ つ

新宿区立四谷中学校長 谷合 明雄

平成20年3月、新学習指導要領が告示されました。今回の学習指導要領は、「生きる力」を育成することを基本理念とし、教育基本法等教育三法の改正を受けて、「個人の自立」や「他者や社会との関係」、「国際社会に生きる日本人としての資質・能力の育成」等の観点から踏まえている点に特色があると言われております。主な改善事項としては、体験活動の重視、コミュニケーション能力の育成を含む言語活動並びに道徳教育の充実などが挙げられております。また、必修教科の授業時数は、週29コマ、年間1015時間で35時間増加しております。これは、必修教科の授業時数を増やして学力を確実に定着させる方策を探ろうとし、「確かな学力保証」を指向したものといたしております。

一方、新しい学校運営の方向を探る動きとしては、平成16年の「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の改正により、その47条5項で学校運営協議会の設置について決まったことが挙げられます。この法律は、新しい学校運営の方法について規定しております。その規定の主なものは、教育委員会による学校運営協議会の設置、学校運営協議会の委員は保護者や地域より選出、学校運営の基本的な方針の学校運営協議会による承認、学校運営協議会による教育委員会や校長への意見表明、学校の教職員の採用などについて所轄の教育委員会に意見表明の権限を有するなどです。

本校では、こうした教育界の動きの中で、平成18・19年度の2ヶ年に亘り文部科学省のコミュニティ・スクール調査研究校を受け、研究を進めてまいりました。研究のテーマは「都市型コミュニティ構築に向けての学校の在り方」とし、サブテーマを「新宿区が推進する都市型コミュニティの構築に向けて」としました。研究の方向としては、学校の果たすべき役割と可能性を探ることを主眼に置き、地域人材の活用、「四谷学（総合的な学習の間）」の実践、地域活動への参加等の取組を通して、基礎学力の定着と個性を生かす教育の充実を図ることに設定しました。また、研究の2年目は、コミュニティ・スクールを「地域協働学校」として位置づけ、家庭や地域社会との融合、幼保・小・中一貫教育、補充と探求学習等の体制づくりにも意を用いました。

平成20年度からは、新たに新宿区研究発表校「地域協働学校推進モデル校」として再発足し、①「学校運営協議会の在り方」、②「学校と地域（コミュニティ）との連携」、③「学校評価の在り方」の3点を研究の中身として実践を積み上げ、一定の成果を残せたと考えております。新宿区としては、本校の実践を基礎研究とし、地域協働学校推進委員会での検討を受け、必要な管理運営規則等の改正を経て、平成22年度以降、設置可能な地域から順次地域協働学校を指定していく予定と聞いております。本校の研究は緒についたばかりで今後深めるべき課題も多々ありますが、本校の取組が本区並びに各地区での新しい学校運営の一助になれば幸いと考えます。

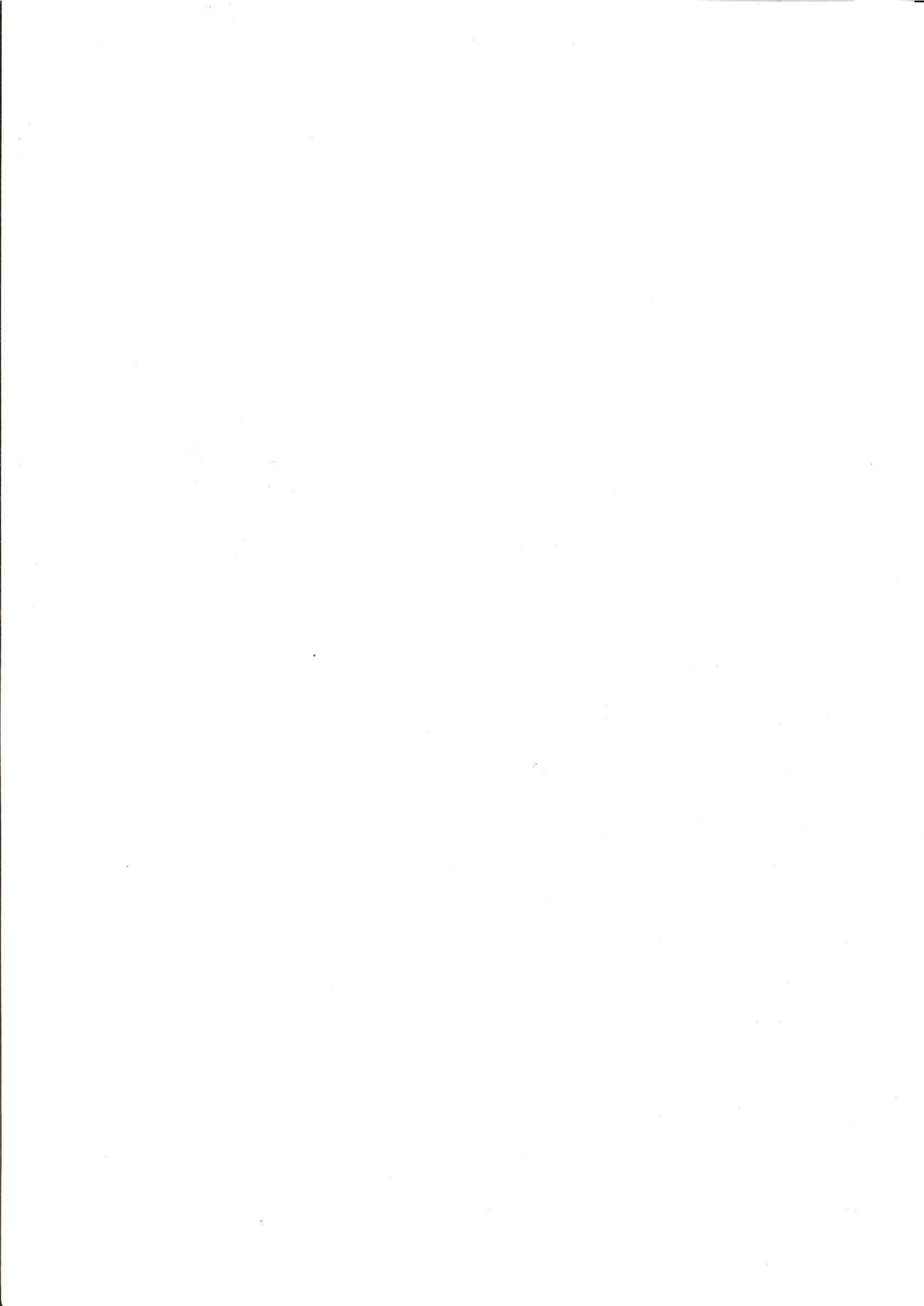
この間、学校運営協議会の学識経験者をお願いした国立教育政策研究所部長葉養正明先生を始め地域の代表の方々、保護者の皆様、研究をリードしていただいた新宿区教育委員会を始めとした、各講師の諸先生方に心からお礼申しあげ、あいさついたします。

目 次

あいさつ	新宿区教育委員会教育長 石崎洋子	1
あいさつ	新宿区立四谷中学校長 谷合明雄	2
あいさつ	学校運営協議会会長 葉養正明 (国立教育政策研究所部長)	3

【平成20年度の研究】

I 地域協働学校推進モデル校を目指すもの		
1 はじめに		5
2 地域協働学校推進モデル校の立ち上げ		5
3 子どもの変化を看取り、指導する体制の確立		8
4 地域協働学校推進モデル校四谷方式の確立		8
5 学校運営協議会の在り方と果たすべき役割		11
6 学校と家庭・地域社会との双方向の活動の展開		12
7 確かな学びを保証する学習システムの開発		13
8 幼保・小・中連携による一環教育の推進		14
9 地域協働学校推進モデル校の可能性		15
II 研究計画並びに経過報告		
1 研究主題設定の理由		16
2 研究の方法		16
3 研究の経緯		17
III 研究内容		
1 学校運営協議会の発足		18
2 各分科会の活動内容		19
(1) 第1分科会 学習支援		19
(2) 第2分科会 健全育成・安全		23
(3) 第3分科会 文化・スポーツ		27
(4) 第4分科会 学校評価研究		30
3 校内外における研究授業等		38
IV 研究のまとめと今後の課題		40
V 資料		
資料1 平成20年度 新宿区立四谷中学校 学校運営協議会 議事録		42
資料2 地域協働学校推進事業実施要綱		46
資料3 地域協働学校推進事業実施細目		48



あいさつ

「学校運営協議会に期待されること」

学校運営協議会会長 葉養正明

(国立教育政策研究所部長)

I 「開かれた学校」づくりの潮流

平成 18 年 12 月に制定された新教育基本法第 13 条には、学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力が規定された。しかし、とりわけ義務教育段階の小中学校については、明治初期の発足以来一貫して家庭や地域社会との緊密な関係を築いてきたから、あらためて学校、家庭、地域住民等の相互の連携協力をうたうまでもない。にもかかわらず、昭和 59 年に発足した臨時教育審議会では「学校の閉鎖性」が指摘され、第三次答申には「開かれた学校」づくりの推進が盛り込まれることになった。教育の世界に「開かれた学校」づくりという言葉が流布するようになった背景である。

平成 20 年度から四谷中学校に設置されている学校運営協議会は、以上のような経緯の中で生まれたものであり、「開かれた学校」づくりの一環である。直接的には、平成 16 年の地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部改正で、学校運営協議会設置規定が設けられたことを背景にしている。

なお、第二次大戦後の学校と地域との連携協力の方式がどう推移してきたかを図示すると、次のようになる。

学校と地域との連携方式の整理

	協力	参加	支援	協働	管理
これまで取り組まれて いる諸活動	PTA活動 等 地域子供会 子ども健全 育成会	学校ボラン ティア 地域の危険 マップづくり	学校支援地 域本部 教育プラッ フォーム NPO等に よる学校支 援	学社融合	学校運営協 議会
教育意思決 定の中心的 な担い手	各学校 PTA 地域団体	各学校 PTA	各学校 学校群 教育委員会	?	学校運営協 議会委員 教育委員会
教育課程に 与える効果	教育課程に 及ぼす効果 は小さいが、 教育課程実 施を支援す る機能	指導過程を 豊かにする 効果	カリキュラム の再構築	カリキュラム のインキュ ベーション (孵化)	保護者、地 域住民によ る教育課程 管理
これからの 学校づくり のためには			○	希望	△

この図について若干説明を加えると、学校と地域との連携協力の方式は、左から右へと推移している、と言ってよい。簡単に言えば、学校教育や学校運営等への保護者、地域住

民の参加、関与の度合いが深まってきている、ということである。

四谷中学校に設置されている学校運営協議会は、保護者、地域住民の関与の度合いがもっとも進んだ方式である。欧米等は言うに及ばず、アジアでも徐々に広がりを見せている方式ではあるが、我が国の140年ほどの学校の歴史の中では、初めての仕組みのためにとまどいも見られる。

II 学校運営協議会の特色

ところで、学校運営協議会という仕組みはどのような点に特色を持つのだろうか。図に示されるように、法律で定められた学校運営協議会は、それぞれの学校が職員会議などで従来決めてきたことの一部を、職員会議等に代わり決定する機関である。

法律上の規定に基づいて考えると、もっとも重要なのは、校長が教育課程編成を進めるに際して、その基本的な考え方を承認することや教職員の任用等に関し意見を表明することである。つまり、学校運営協議会設置校については、校長は翌年度の教育課程編成を進める際に、あらかじめ学校運営協議会から承認をとりつけておく必要がある。また、年度末には、翌年度の教職員の体制について任命権者（都道府県教育委員会）に対し意見の表明を行う必要がある。言うなれば、学校運営協議会は、公立学校に設けられた学校理事会と考えることができる。

III 学校運営協議会のこれから

我が国の公立学校のあり方として、「開かれた学校」づくりをいっそう推進していくことの意義は大きい。各地や各学校で考えあぐねているのは、学校運営協議会方式が時期尚早なのか、それとも「信頼される学校」づくりに向けて避けて通れない道か、という問題への判断の仕方である。

学校・家庭・地域の信頼関係をどう築くかという問題は、我が国の私事化（「私」を日常生活の優先的原理とする社会の特徴を表現している）の行き過ぎの是正、「新しい公共」の構築という視点でも重要な課題と考えられる。さらに、人々への信頼、ネットワーク、規範の存在という3要素によって定義されるソーシャル・キャピタル（社会関係資本、人間関係資本などと訳される）の度合いは、学校教育の成果と高い相関関係をもつ、というパットナム（ハーバード大学政治学教授）による実証研究やその他研究者による研究成果もあらわれている。

学校運営協議会のこれからの考える場合、基本とすべきなのは、地域協働学校を実質化するには、それが唯一の方式なのか、それとも、学校と家庭、地域との連携協力の方式は他にもあり得るのか、という問題として考えていくことであろう。

仮に、学校運営協議会方式を進めるにしても、その運用にはかなりの幅があるのが全国の実態である。四谷中学校が取り組む「地域協働学校」という理念そのものは、今後の公立校の有り様を示している。

「信頼される学校づくり」「質の高い学校づくり」に向けた「地域協働学校」の構築という視点を大事にしながら、どのような事業、領域に力点を置いて新宿版の「学校運営協議会」を組み立て、運営するのが課題なのではないか。

I 地域協働学校推進モデル校が目指すもの

1 はじめに

平成16年6月に「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」が改正され、同年9月に施行された。この法律は、保護者や地域住民が一定の権限を持って学校運営に参画することを可能にする「学校運営協議会制度」が規定されているのである。この協議会は、①校長が作成する学校運営の基本方針の承認、②教職員の任用に関し、教育委員会に意見を述べるなどの権限を有しており、これまで続いてきた学校制度とは大幅に異なるものである。こうした学校制度のしくみは通称、コミュニティ・スクールと呼ばれており、古くはサッチャー政権下の英国から始まって各国に波及したとも言われている。

新宿区には、区長が推進する「都市型コミュニティー構想」があり、学校を基地としたあたらしい町づくり構想の実現に向け、特色ある学校づくりに資することができると考え、平成20・21年度新宿区研究発表校「都市型コミュニティー構築に向けての学校の在り方」—— 地域協働学校推進モデル校の構築に向けて —— の研究を開始することとしたのである。

幸いなことに、本校には、平成18・19年度の2ヶ年間に亘って文部科学省コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）推進事業調査研究校の指定を受け、調査・研究を推進してきたという基盤があったので、スムーズに研究を開始することができたのである。新宿区にあって四谷地区は町会の活動が活発であり、地域社会としての確かな基盤を有しており、学校を支え、支援する体制が十分整っていることも研究を進める上で考慮した事柄である。平成13年4月に昭和22年創立の新宿区立四谷第一中学校、四谷第二中学校を統合し、新宿区立四谷中学校として発足し、満7年を経過し8年目に入っているこの時期に、教育の中身の充実を図っていきたいとの願いが研究の背景にある。学校統合から5年間は、前校長を中心にハード面や学校の枠組みづくりに取り組んできたが、それも一段落した現在はソフト面、確かな学力の獲得や生き方教育、心の教育の充実に取り組む時期と考えられる。学校を側面から支える地域社会や保護者の強力な援助を戴いて、この四谷の町でこの「協働の教育」を実践したら極めて大きな成果が得られるものと確信しているところである。

2 地域協働学校推進モデル校の立ち上げ

(1) 研究にかかわる教育の歴史的背景

「一人一人の個性を尊重し、よりよい自己実現を援助する教育」としてその源流を探ると1図「地域協働学校の位置づけ」で示したように、昭和46年の中教審答申（通称46答申）に遡ることができる。「国民の教育として不可欠なものを共通に習得させるとともに、豊かな個性を伸ばすことを重視しなければならない。」とある。それが、昭和58年の中教審教育内容等小委員会審議経過報告に受け継がれ、臨教審第4次答申で「個性重視の原則」として収斂し、その後の諸答申には必ずこの「個性」や「個の自立」の問題が出てくるのである。

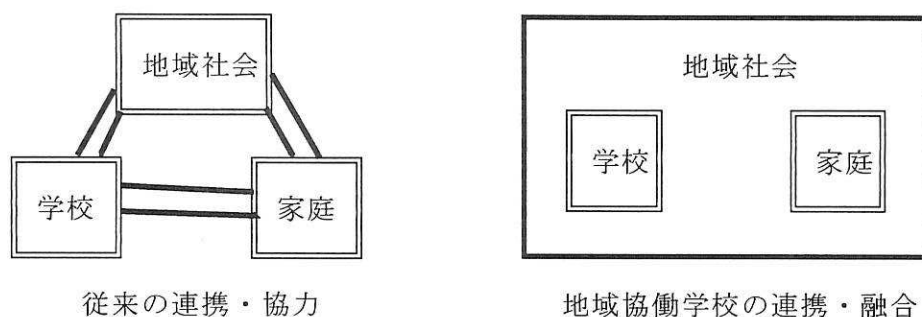
一方、「基礎的・基本的な内容の確実な定着」の問題は、近代的な学校が開始された明治期から終始一貫強調されていることであり、本研究でも基本的に押さえた内容である。

生涯学習が言われ始めたのは、昭和40年のUNESCO本部の成人教育推進国際委員会が採り上げて以来、成人が生涯に渡って学ぶ学習として昭和56年中教審答申、昭和61年の東京都生涯教育推進懇談会報告等へと受け継がれてきているのである。本研究では、地域の人々、保

護者等の全面的な協力を仰ぎながら活動を推進している。地域社会の中には、現役を退いたが自己の生き甲斐を追及できる活動を求めて待機している方々が多数存在している。生涯現役、生涯に亘って学ぶ活動を子ども達の教育に生かしてくれる方々により本研究は支えられているのである。

(2) 地域協働学校推進モデル校（新宿型コミュニティ・スクール）の構想

区長が推進する都市型コミュニティ構想とは、そこに在住する区民が自分の持っている諸能力を生かして町造りに参加しながらコミュニティーの形成を図るというもので、農村部等に見られるコミュニティーとは異質なものである。本校の方針、位置づけ、町会や保護者の願い等を勘案していったとき、本校のコミュニティ・スクールは、四谷の町に住む大人、保護者、学校の教職員の三者が融合して四谷の町に住む子ども達の教育に当たるという方向性が最も適しており（2図）、名称は「地域協働学校推進モデル校」としたのである。なお、「協働」とは、「協力して働くこと」の意味であり、「協同」（心を合わせ、助け合って共に仕事をする）に近い意味合いとなっている。（広辞苑、岩波書店より）



2図 地域協働学校のイメージ

地域の教育力の導入であれば、「特色ある学校づくり」として様々な学校で取り組まれていることで、何ら新味は無いとの批判もあろうかと思われるが、この地域協働学校推進モデル校では、教育の到達目標を「学力保証」と「進路保証」に置き、将来的にも四谷の町を支えて守っていく郷土への帰属意識の強い「四谷区民」を育成することを大きなねらいとしているのである。

(3) 地域協働学校推進モデル校での主な取り組み

1図にも示したとおり、この地域協働学校推進モデル校で取り組む主な活動は、次の8つの内容である。

- ア 確かな学力の獲得と学力保証（オールB、オール3以上の学力の獲得）
- イ キャリア教育の推進と進路保証（自己の進路希望、適性に基づく進路指導の実践）
- ウ 1単位時間45分、30コマによる必修教科の展開
- エ 放課後30分間の帯時間帯を活用した「補充と探求学習」の時間の設置及び展開
- オ 3年間を見通した「四谷学」（総合的な学習の時間）の実践
- カ 4つの事業推進部を中心とした組織的な教育実践
- キ スクール・コーディネーターと連携した地域に開き、地域と一体となった教育活動の推進
- ク 幼保・小・中連携による一貫教育の推進
- ※ 4つの事業推進部とは、「学校支援」、「健全育成・安全」、「文化・スポーツ」、「学校評価研究」の各分科会である。
- ※ 幼保・小・中連携は、四谷子ども園、四谷小、四谷第六小、花園小との連携である。

3 子どもの変化を看取り、指導する体制の確立

「むかつく」「切れる」等、最近の子供たちの心の内面には、これまでの既成概念では判断しきれない大きな変化が見られる。我々、教育関係者の知らないところで、子供たちが刻々と変わってきていて、ある日突然問題行動として表面化し、暴走していくのかもしれない。

(1) 子ども達が抱える課題への対応

現在の生徒の生活は、塾・習い事（本校生徒は 87 %）の日常の中で、家庭と学校の二つの生活空間と肥大化したマスメディアの情報空間に心を奪われ、家でテレビゲームやファミコンなどの一人遊びに熱中する実態にある。一方、家庭や社会の教育機能の低下も課題となり、社会性の未発達、規範意識の希薄化、自立の遅れなどが懸念される場所である。その結果、本来、家庭や社会が担うべき躰や挨拶・礼儀・食育等の基本的な生活習慣の指導も学校教育の場に持ち込まれ、学校はその許容範囲を超えた対応を余儀なくされ、制度疲労を起し、学習活動という本来の教育機能を果たせなくなってしまうのである。

子供たちの変化は、良いにつけ、悪しきにつけ、生きている以上は必ず現れてくるものである。その変化を看取り、適切な指導・援助をするための対応・措置・施策を推進できるか否かが、学校が安定して所期の目標達成に邁進できるかどうかの分かれ目となるのである。学校は組織体であるから、校長を頂点とした教職員に加えて、家庭、地域社会の人々まで巻き込んだ強力な指導体制作りと、一体となった指導・援助を推進することによってこのことは確実に果たせるものと考えられる。ここに、地域協働学校推進モデル校設置の意義があるのである。

(2) 子供たちの変化を看取る教職員の育成

学校に於ける教職員は専門職としての教育機能を有し、教育公務員特例法においても他の公務員とは一線を画した処遇を受けている。保護者や市民の信託に応える校務運営を推進するためにも、公教育の場に民間と同様な「職能性」の考え方を導入することも検討してよいと考える。学級担任は担任としての本来の業務を、教務主任、生活指導主任、学年主任、保健・給食主任、進路指導主任等のそれぞれの業務を創意工夫の下に確実に果たしきってこそ、子供たちの変化を看取る組織体としての学校が出来上がってくるものと考えられる。

昨今、国を始めとして都や市町村も「スクール・カウンセラー」の配置を図っており、子供たちの心の内面理解の点からも望ましいことである。本校にも平成 13 年 4 月の開校の当初から、東京都の派遣によるスクール・カウンセラーが配置されている。スクール・カウンセラーの仕事は、個々のケースへの対応や電話相談に止まらず、家庭や地域社会の人々を対象とした家庭教育学級の開催や、発達障害のある生徒への相談、新入学生徒の適応指導を小学校と共に実施するなど、内容的にも広範な展開をみせ、四谷中学校を基地とした総合的な取組になりつつあるのである。

4 地域協働学校推進モデル校四谷方式の確立

四谷の町に暮らす子ども達、保護者、地域の方々、教職員が、都市型コミュニティ構築の過程で「共に学び」「共に育ち」「共に暮らし、生きる」学校及び地域づくりを目指して共に努力していく。ここに、学校を基地とした地域協働学校推進モデル校設置の意義が見出せるのである。

(1) 家庭や地域社会の方々に依頼する場を、年間指導計画に位置付ける。

授業や地域教材の開発や活用に、教育ボランティアとして保護者や地域社会の人々の積極的な参加や協力が得られるようにすることは大切なことである。各教科や四谷学（総合的な学習の時間）、道徳の時間の指導等の年間指導計画の中に、保護者や地域社会の人々の協力の基に実施する授業を位置付けておくようにする。単に、教科書や資料といった紙ベースの教材よりも、地域社会で活躍する方々の肉声を通しての語り掛けは臨場感をもって子供たちに受け止められるものと考えられる。その際、教職員は、日頃の校務の多さからくる多忙感により積極的に地域の人材発掘や地域社会との関わりを持つ時間的・精神的なゆとりが無いと思われる。地域の中であって、学校と家庭や地域社会との接点を築ける「スクール・コーディネーター」のような方を依頼しておくことが、結果として事業を軌道に乗せる早道と考えられるのである。

ここで、学校教育をあらゆる面から支援していく教育ボランティアについて、その働きの中からまとめてみると、次の3図のように示すことができる。

活用の場面	各教科・四谷学、部活動・学校行事・道徳の時間等
① 地域の専門家	専門的な知識や技術等を持つ保護者や地域の方々
② 学習支援者	教科の指導助言者、TTとしてのボランティア
③ 課外活動支援者	趣味や特技を生かしたボランティア、教育相談、触れ合い活動

3図 教育ボランティアの種類とその働き

(2) 学校を基地とした四谷方式による取組

ここに構築する地域協働学校推進モデル校の四谷方式による取組とは、家庭や地域の人・もの・ことと直接触れ合う時間や空間、場を意図的に設定し、協働の活動や学習の喜びを共に共有し、積み重ねていく参加型の取組である。新宿区が標榜する都市型コミュニティの考え方もこれと同じで、自らの持つ知識・技能・能力を提供しつつ町作りに参画するという参加型のコミュニティなのである。

4図は、地域協働学校推進モデル校の全体構造図である。これは、学校運営協議会を中心として、教育委員会との連携、学校と学校運営協議会との関係等が鳥瞰できる図である。地域協

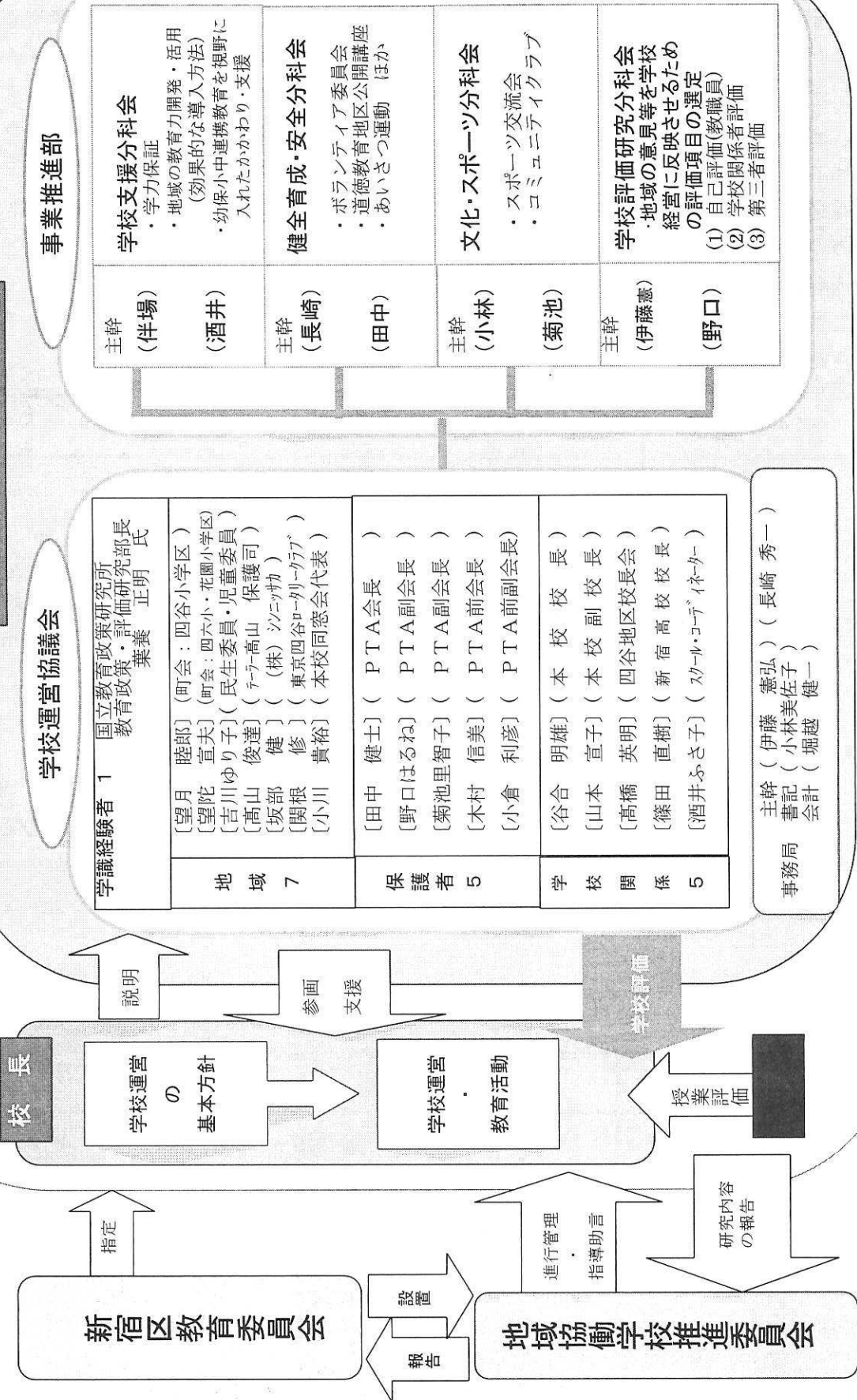
事業推進部名称	業 務 内 容
学校支援分科会	学力保証、地域の教育力の開発・活用、幼保・小・中一貫教育
健全育成・安全分科会	ボランティア委員会、道徳教育地区公開講座、あいさつ運動等
文化・スポーツ分科会	スポーツ交流会、コミュニティクラブ
学校評価研究分科会	地域の意見を学校経営に生かすための評価項目の検討

5図 地域協働学校推進モデル校の事業推進部の内容

地域協働学校推進モデル校(四谷中学校)

学校運営協議会

地域協働学校運営システム



[4 図]

働学校推進モデル校としての実践は、主として4つの事業推進部を中心に具体的な活動を推進し、成果を学校運営協議会に戻して審議するという形態で進めた。事業推進部の各部の名称及び活動内容は5図に示した通りである。ここに示した業務は、その一例であるが、地域協働学校推進モデル校の中心的活動であり、今後の実践の過程で拡充・発展させていく必要がある。

さらに、この四谷方式の取組は、結果として大きく次の3点の成果が期待できるのである。

① 学ぶことの本来の意味

学ぶの語源は「まねぶ」だと言われている。指導者や大人のやることを「まねする」ことから転じて「学ぶ」になってきているのである。教育ボランティアとして学校教育に協力してくださる方々の持つ専門的な能力等を臨場感を持って「まねる」ことは、「学び」の本質に直接かかわるものとして評価できるのである。

② 働くことの意味と社会参加

人間は何らかの仕事（役割）を持って社会的な貢献と責任を果たしている。それは、生活の糧としての収入を仕事の代償として得る手段でもある。しかし、昨今の社会情勢では、ニートやフリーターと呼ばれて正規の雇用に基づく仕事に就かないでいる若者が増えており、社会問題化しているのである。このニート、フリーターが増加している原因は、様々なものが複合的に係わっており、一概には言えないが、個の確立が未達成、豊かさの中で働く必然性を感じないなどの内容が背景にあると考えられるのである。地域協働学校推進モデル校の取組を通して働くことの意味や社会参加の意義等についても理解を深めさせたいところである。

③ 生き甲斐の追求

人は誰でも生き甲斐なしには生きられない。地域協働学校推進モデル校の活動の場では、受益者である生徒自身も、教育ボランティアとしての援助者も共に活動することを通して「生き甲斐」を追求することが可能となるのである。

5 学校運営協議会の在り方と果たすべき役割

(1) 地方教育行政の組織及び運営に関する法律の改正

平成16年6月に「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」が改正（同年9月施行）され、保護者や地域住民が一定の権限を持って学校運営に参画することを可能とする「学校運営協議会制度（いわゆるコミュニティ・スクール）」が導入された。学校運営協議会は、保護者や地域住民の中から教育委員会に任命される委員で構成される合議制の機関であり、①校長の作成する学校運営の基本方針の承認、②教職員の任用に関し、教育委員会に意見を述べるなどの権限を有している。

学校運営協議会を通じて、保護者や地域住民が一定の権限と責任を持って学校運営に参画することにより、多様なニーズを迅速かつ的確に学校運営に反映させるとともに、学校・家庭・地域社会が一体となってより良い教育の実現に取り組むことを基本的なねらいとしている。平成18年12月に成立した改正教育基本法でも、学校・家庭・地域社会の連携が改めて盛り込まれたのである。

(2) 地方協働学校推進モデル校における学校運営協議会の役割

これまで、学校は「校長」を頂点として、子ども達、教職員、保護者、地域社会、関係機関等との連携の下で一定の教育目標の達成を目指して努力してきた。こうした中で、「校長が

変われば学校が変わる」ということが言われてきた。このことも確かなことで、経営手腕のある校長が赴任したとたんに、学校が生き生きしてきたという事実は数多くある。しかし、これからの学校は、校長や教職員が変わろうが、変えてならないのが学校の「校風」であり、「経営基盤、経営体質」であると言える。学校は生き物のように、浮き沈みがあることも事実ではあるが、その浮き沈みを最小限に抑え、安定した経営基盤を築いていくことこそ重要と考える。ここに、学校を側面から支援する組織として、校長を交えた第三者機関としての「学校運営協議会」の設置の趣旨がある。

現在、本校の学校運営協議会は、4図「地域協働学校推進モデル校」で示した通り、地域選出委員7名、保護者委員5名、学校関係者委員5名、学識経験者1名の計18名で構成している。新宿区におけるコミュニティ・スクールの検討は、当初から「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」に規定されている「教職員の任用に関し、教育委員会に意見を述べる」権限をはずした形で出発してきている。学校運営協議会運営要綱には、協議会の承認事項として、ア教育目標及び経営方針、イ教育課程の編成に関する基本方針、ウ予算の編成に関する基本方針、エその他校長が必用と認める事項となっている。学校運営協議会は、合議性の組織ではあるが、地域の学校としての地域の意志を反映した普遍性を担保しつつも、教職員の業績を評価し任用に係わるなど校長を中心とした経営組織・取組を評価し意見を述べるなどの業務はなじまないとの考え方である。本校の現在の学校運営協議会は、ここに示した承認事項のみならず、事業推進部が取り組んできている事業、内容、取組の方向性等を協議する支援組織として機能している実態がある。あくまでも、地域に在り、地域の活動の拠点としての学校を援助するとの支援部隊に徹するということである。学校運営協議会のこうした体制は保持しつつも、昨今東京都の人事部が示している教員のフリーエージェント制については、意欲ある教員を確保する意味でも検討していく必要があると考える。

6 学校と家庭・地域社会との双方向の活動の展開

地域社会には、様々な活動がある。学校としてそうした活動への積極的参加を図ることは極めて大切なことである。また、学校での活動や成果を広く家庭や地域社会、関係機関等に発信し、よい意味での世論形成を図っていくことも大切なことである。情報発信の手段としては、学校だより等の紙面やインターネットのホームページなどが有効な手段となる。

(1) 子供たちの感想文等を家庭や地域社会に戻す

授業で子どもたちが体験したり、考えた内容を家庭や地域社会に戻すことによって、学校と家庭・地域の信頼関係が更に深まり、教育効果も増大すると考えられる。家庭や地域社会への情報のフィードバックの方法としては、学校だより、学年・学級通信等が考えられるが、地域の方々への手紙という方法も有効であろう。子供たちの書いた感想文に保護者や地域の方々のコメントを書いていただくということも考えたい。学校と家庭・地域社会の相互が交流することにより、日々の授業も更に深まった展開を見せることとなるのである。

(2) 学校外活動への積極的な参加を図る

町会や自治会行事、文化・スポーツ活動など、学校外の組織で企画され、実施されている行事も多数ある。学校ではあまり目立たない子供が、地域の祭りやお囃子の一員として生き生きと活躍している場面に接し、驚かされることも少なくない。そして、こうした行事への教職員

の参加が極めて少ないこと、また、中学生の地域行事への参加率が年々減少してきていること等も課題として指摘できるのである。

こうした活動は、子供たちの生きた体験学習の場として重要なものであるが、それが学校教育の場に生かされないままに終始していることは考えなければならないことである。管理職だけでなく、教職員が地域社会に出て活動を共にしたら、子供たちの別の面を発見できるし、そこで行われている活動は、「郷土を愛する心」や「集団の一員としての自覚」「家族を大切に思う心」「役割と責任の自覚」「思い遣りの心と行動」等の価値の自覚や自己を生かす能力を学ぶ生きた教材として多様に活用できるのである。

(3) 家庭や地域社会の教育力回復への学校の役割

現在、学校も家庭も地域社会もそれぞれに子育ての悩みを抱えつつ、模索しているのが事実である。家庭や地域社会の教育力の回復が必要であるとの指摘は、有識者や各種答申等に様々に盛られているが、未だに是という決定的な改善策が示されないままに終始しているのも事実である。いまこそ、教育の専門家集団としての学校の役割を深く認識し、地域社会の教育センターとしての役割を担いつつ強力なリーダー性を発揮していく必要がある。学校を基地としてそこに集う保護者・地域の方々、教職員が一体となって取り組んだとき、学校はその本来の教育機能を発揮しつつ、子ども達のよりよい自己実現とよりよい社会参加能力の開発に向けて邁進できるものと考えられる。

7 確かな学びを保证する学習システムの開発

(1) オールB、オール3以上の達成を目指す学習指導

平成14年度から中学校教育の中でも絶対評価の導入が図られ、目標に対しての達成状況を表す示し方を変更した。この評価システムを導入したとき、学習指導要領の目標から導きだされる評価規準（クワイリオン）については、国立教育政策研究所等が示した案があつてどこの学校でも手に入れられたが、目標がどの程度達成されたかを量る評価基準（スタンダード）については、各学校が考えるものとして例示が無かった。本校では、この評価基準の開発を研究の基本に据えて、学力の確かな把握と学習のP（計画）D（実行）C（診断）A（目標未達成の生徒への指導）サイクルをきめ細かく実施することにより、絶対評価でオールB、オール3以上の学習の実現状況達成を目指すという確かな学びのシステムを開発したのである。

(2) 評価計画の開発と補充・探究学習の推進

必修教科・選択教科の指導計画・評価計画を開発するに当たって、各教科共通に使ったフォーマットは〔6図〕に示すような項目で編集した。

月	単 元 名	学習事項	学習の目標	評価の規準 (クワイリオン)	学習の実現状況 (スタンダード)	評価計画 (国語5観 点、他教科 4観点の時 間毎の看取 り計画)	評価方法 (テスト、作 文、発表、 提出物、観 察など)	時間

〔6図〕 評価計画作成のフォーマット

この計画を作成する際、学習の実現状況（評価基準）は、曖昧な表現（例えば、「しっかりと」とか「十分に」といったもの）は一切避け、具体的な状況がイメージできるものとしたのである。数学で、「係数に少数や分数を含む一次方程式が解ける。」と言え、達成の状況が一目瞭然に分かるのである。

(3) 45分30コマ授業の実施と放課後の補充・探究学習

右の図は、本校の生活時程を表したものである。月曜日から金曜日まで全ての時程で学校を運営することとなり、午後3時20分から3時50分までの30分間は「第7校時」として、補充学習、探究型学習などを年間指導計画に基づき計画的に実施している。

学習効果を高めるには、PDCAのサイクルの中、特にCとAが早めに措置された方がよいのである。今日の学習で躓いた点は、今日中に学習し直した方がより定着するのである。放課後の補充学習は、こうした考え方に立ち、主として国語、数学、英語、理科、社会の5教科について実施しているのである。この補充学習に、長期休業中の補充学習を加えると、更に指導効果を高めることが出来るのである。また、必修教科で学習した内容

段 階	時 程	月	火	水	木	金
予 鈴	8:25					
朝学活	8:30 ~ 8:35	朝				
1校時	8:40 ~ 9:25	学				
2校時	9:35 ~ 10:20	○	○	○	○	○
3校時	10:30 ~ 11:15	○	○	○	○	○
4校時	11:25 ~ 12:10	○	○	○	○	○
給 食	12:10 ~ 12:40					
昼休み	12:40 ~ 13:05					
5校時	13:10 ~ 13:55	○	R	○	R	○
6校時	14:05 ~ 14:50	○	総	道	総	○
清掃学活	14:55 ~ 15:20					
7校時	15:20 ~ 15:50	○	○	○	○	○
生徒下校	15:55					
部活動	16:00 ~					

内容を基にして、更に一層学力の向上を図るためには、探究型学習をこの補充学習と同じ時間に設定しておくことにより、オール3以上の学習の到達度を達成している生徒には有効な機会となるのである。これまで、「基礎・基本の徹底」、「確かな学力の獲得」などの課題を達成するため、学習の遅れがちな生徒の対応はどこの学校でも取り組んできたと思われるが、一方、学習の進んだ生徒をより伸ばすという取組はこれまであまりできていなかったと思われる。この点が戦後教育の最大の課題として指摘できるのである。

平成20年3月告示の学習指導要領では、いくつかの必修教科の授業時数の増加が図られ、結果として選択教科が事実上廃止ということになる予定である。そうすると、一定期間必修教科を学習した後の学習の到達度に応じた対応をどのように組んで行くかが課題となる。必修の時間の一部を割いて、到達度別に「補充と発展」学習を計画することが考えられる。本校の第7校時は、この選択教科の果たしてきた役割に代わるものとして機能してくるのである。このシステムの研究は今年度で3年目で、その成果の検証はこれからになると思われるが、必ずや大きな成果が残せるものと確信しているところである。「探究型学習」のカリキュラム開発、これは、発展的内容を扱う選択教科のノウハウをベースにして、今後、生徒の実態、各教科の特質、学習指導要領の方向性等を総合的に検討して開発していきたいと考えている。

8 幼保・小・中連携による一貫教育の推進

平成19年4月には、新宿区立四谷小学校が開校した。この学校は、いずれも100年以上の伝統のある旧四谷第一小学校、四谷第三小学校、四谷第四小学校の3校を統廃合する形で開校したものである。最近、注目を集めてきた幼稚園と保育園を統合し、幼保一元化の施設として四谷子ども園も併設されている施設である。また、幼児を抱える若い保護者への支援を目的とした「子育て支援センター」も入った複合施設なのである。従って、この施設には0歳児の子どもから13歳の小学校6年生まで、幅広い世代の子どもが学ぶ施設となったのである。

この施設に、本校3年間の中学校教育を接続すると、実に0歳から15歳までの15年間一貫教育が可能となるのである。我が国でも珍しい施設であり、「学びの連続性」、「学びの一貫性」が追求できるということで、今後の成果が期待されているところである。

しかしながら、この四谷地区には、四谷小学校の他に地理的には若干離れているが、学区の幼稚園・小学校として、花園幼稚園・花園小学校、四谷第六幼稚園・四谷第六小学校の2校2園が存在する訳で、幼保・小・中連携、幼保・小・中一貫を考えるとときには、この2校2園を含めた全体として捉えていく必要がある。ここで、重要となるのが、「四谷地区としての学校・園」という考え方である。四谷の町に住む子ども達を、四谷の町の保護者や地域の人々、そして学校・園の教職員の3者が一体となって融合しながら育てていくということ、すなわち、これまで本校が取り組んできた地域協働学校推進モデル校を充実することによって、幼保・小・中連携による一貫教育の推進が可能となってくるのである。

9 地域協働学校推進モデル校の可能性

これからの学校像を求めて、地域協働学校推進モデル校の研究を進めてきた。本校では平成18・19年度と文部科学省指定のコミュニティ・スクール推進事業調査研究校としての研究の下地があったので、それを発展させる形態での研究であった。「地域に開かれた教育の推進」が言われて久しいが、施設・設備の開放であったり、学校を開くことが日常化しておらずイベント的なもので終わっていなかったか等の反省の上に立って、家庭教育、社会教育の持つべき機能を確立しつつ、学校教育と一体となった取り組みができないかどうかを探ることが大きな目標であった。コミュニティ・スクールという名称を避けて「地域協働学校推進モデル校」とネーミングした理由もここにあったのである。

研究を1年間進めてきた現在、極めて高い確率で「地域協働学校推進モデル校」が可能であるとの感触をもつに至ったのである。その理由の第一は、四谷地区には多くの善意の町会があり、江戸文化を受け継ぐ古い街並みと人情があり、学習を支える条件が十分備わっているからである。また、スクール・コーディネーターとして人材を得たことが、学校と家庭・地域社会を結ぶ太いパイプとなったことも理由の一つである。本校で開発した「四谷学」（総合的な学習の時間）の講師の選定や活動の場の確保、カリキュラム開発にしても、スクール・コーディネーターのおかげなのである。

総合的な学習の時間と必修教科・選択教科相互の関係についてはここで改めて解説するまでもなく、本校ではこれら二つが相互補完関係に位置付いて、それぞれの教育活動が互いに相手を強化・充実する働きを示しているのである。このことが、地域協働学校推進モデル校の最終目標である「学力保証」、「進路保証」の達成に寄与しているのである。さまざまな可能性を秘めた「地域協働学校推進モデル校」の取組、今後も実践を継続し、確かな証を示しつつ教育の一つの方法として確立していきたいと考える。

Ⅱ 研究計画並びに経過報告

1 研究主題設定の理由

本校は、平成18年度から2年間にわたり文部科学省のコミュニティ・スクール調査研究校として、コミュニティ・スクールの在り方を研究してきた。「都市型コミュニティの構築」という大きなテーマに基づき、コミュニティ・スクールの在り方を探り、平成19年9月に研究発表会を行い、子どもの教育に関わって中学校が地域のコミュニティ形成の基地となるという仮説を提示した。今年度はこの成果と課題を踏まえ、新宿区の地域協働学校推進モデル校として改めて研究をスタートしたものである。

当初から新宿区では、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第47条5に規定されている人事案件は除外する形態で出発し、呼称もコミュニティ・スクールや地域運営学校ではなく、地域協働学校推進モデル校とした。(資料：要綱・細目参照)

平成20年3月に教育委員会事務局指導課と学校とで協議を行い、20年度の研究体制の概要が示され、「地域の信頼に応える学校づくりを進める」ため、「保護者や地域住民が運営に参画する公立学校」として研究を進めることとなった。

この背景には、四谷地区の住民の教育にかける熱意や学校への関わりが長年にわたり培われてきたことがある。そこで研究主題を「四谷の町を基盤とした地域協働学校推進モデル校の構築—学校と地域の双方向から子どもの確かな学びと育ちをはぐくむ—」とした。

区教委に示された研究の柱は次の三点である。(詳しくは要綱・細目参照)

- (1) 学校運営協議会の在り方
- (2) 学校と地域(コミュニティ)との連携
- (3) 学校評価の在り方

さらに、これらの研究を通して、本校の教育目標の具現化を地域とともに目指すことができるものと考え、研究の内容と方向性を決定した。

2 研究の方法

(1) 学校運営協議会の設置並びに各分科会による研究の推進

区教委より示された研究の柱(1)学校運営協議会の設置については、学校運営協議会の委員の人選の方法、職務権限の範囲・所掌事項の在り方等を検討の中身とすることとした。研究内容(2)学校と地域との連携、(3)学校評価の在り方については、学校運営協議会の下部組織として分科会を置き、その活動により研究を進めることとした。

(p 5, 6 参照)。

研究内容の(2)にかかわる分科会としては、「学習支援」、「健全育成・安全」、「文化・スポーツ」三つを設定したが、それは、「知・特・体」の3項目に対応し、同時に学校の教育目標にも対応しているのである。

また、学校評価研究分科会は、研究内容(3)のために設置し、地域・保護者・学校が子供を中心としてより力を合わせ、教育効果を高めるためにどのような試みができるか、学校の方向性を確かなものとするために調査研究を行うものとした。

(1)の学校運営協議会の在り方の研究では、平成20年3月末から人選を進めた。学校運営協議会委員の人選については、区教委の示した研究内容(1)学校運営協議会の在り方の中の観点として「学校運営協議会の規模及び運営方法並びに委員の選出方法」についてとして示されているが、先行の研究等を参考にしながら、本校では次の点に留意して人選を進めることとした。

- 1 学識経験者を研究の中心として依頼
(19年度に指導をいただいた葉養正明氏に依頼)
- 2 地域・保護者・学校の三者が同数になるよう配慮する。どのカテゴリーも単独で過半数にならないようにする。
- 3 町会関係者については、旧四谷一中・旧四谷二中の学区から一名ずつ依頼。
- 4 今までにPTA役員、ゲストティーチャーや生徒のボランティア活動、行事等、学校支援・健全育成・文化・スポーツ面で学校に関わってくださり、学校の運営・実態について認識され、学校の課題を意識されている方
- 5 地域の各組織の代表に委員を依頼することは、非常に多くの組織があり、また、いくつもの組織にまたがって役職を受けておられる方もあるため、容易ではない。どの組織の代表から依頼することが良いかは、研究開始時期には判断できなかった。地域の組織を把握することは、モデル事業期間に研究の中で進めていく。
- 6 学校関係者の人選では、幼・小・中・高の連携に意を用いて人選を行った。

(2) 校内外における授業研究等

校内における研究推進及び研究内容のうち、小中連携教育については次の2点に絞って行った。

ア 研究授業による指導方法の工夫改善（学力保証・進路保証）

イ 四谷地区小中連携協議会（幼稚園、保育園、小学校、中学校の発達の連続性を踏まえた連携教育の研究）

ア・イともに数年にわたる積み重ねがあったが、研究母体として新たに地域協働学校推進モデル校事業部を校内分掌として組織した。また、地域協働学校推進モデル校の研究の状況・生徒のボランティア活動等の状況を学校内外に紹介するため、PTA広報委員会との協力体制を作り、学校だより「プラタナス」・広報誌「Let's」のほか、地域の協力を得て町会の掲示板を活用させていただき、随時活動の様子を学校内外へ写真などで情報提供ができるようにした。

3 研究の経緯

(1) 学校運営協議会及び分科会の活動

平成20年5月7日（水）、第1回を開催。委員の委嘱、学校経営方針の説明及び承認が行われた。以後、第2回～4回にわたり、分科会の組織作り・活動内容の検討、学校運営協議会の機能、権限及び責任についての協議、学校の教育活動の報告・承認、学校評価項目の分析及び評価結果の検討等、多くの項目について討議してきた。

（詳細については、P 42 資料 1. 平成 20 年度 新宿区立四谷中学校学級運営協議会議事録を参照）

(2) 校内外における授業研究等

① 研究授業による指導方法の工夫改善（学力保証・進路保証）

地域協働学校推進モデル校の主な取組内容の一つである確かな学力の獲得と学力保証にあたっては、教育課程の工夫・総合的な学習の時間「四谷学」の系統的取組が本校の特色である。この取組は5年間にわたり実践、評価・改善に努めてきた。また、教師の指導力向上・指導方法の工夫改善のため、年間10回の校内研修（うち研究授業4回）を実施、ベテラン教員・中堅教員・若手教員それぞれの課題発見・解決に努めた。

- ② 四谷地区小中連携協議会（幼稚園、保育園、小学校、中学校の発達の連続性を踏まえた連携教育の研究）

ア 四谷地区小中連携協議会

この協議会による四谷地区小中学校の連携は、各小中学校の教務主任を中心として約10年間続いており、小・中一貫を目指した教育に大きな役割を果たしている。

イ 算数・数学連携教育

算数・数学では、小学校の学習段階でのつまづきを発見、解消することにより、スムーズに算数から数学へ移行できるよう、四谷地区校長会が提唱し、小中4校で協力して取り組んだ。

Ⅲ 研究内容

1 学校運営協議会の発足

本校で設定した学校運営協議会委員の人選のための観点に基づき、スクール・コーディネーターと連携しながら、左表のような方々の人選を進め依頼したところ、いずれの方も委員を快く引き受けてくださり、学校運営協議会として発足することができた。

氏名	性別	学校との関係等	
		職種	具体的内容
葉 養 正 明	男	F	国立教育政策研究所部長
望 月 睦 郎	男	B	町 会 長
望 陀 宣 夫	男	B	町 会 長
吉 川 ゆり子	女	B	民 生 委 員
高 山 俊 達	男	C	テ ー ラ ー 高 山 (保 護 司)
坂 部 健	男	C	(株)シニッチカ代表取締役
関 根 修	男	C	三 富 縫 製 (株)代 表 取 締 役
小 川 貴 裕	男	G	同 窓 会 代 表
田 中 健 士	男	A	P T A 会 長
野 口 はるね	女	A	P T A 副 会 長
菊 池 里智子	女	A	P T A 副 会 長
木 村 信 美	女	A	前 P T A 会 長
小 倉 利 彦	男	A	前 P T A 副 会 長
高 橋 英 明	男	G	四 谷 第 六 小 学 校 校 長
篠 田 直 樹	男	G	都 立 新 宿 高 校 校 長
酒 井 ふさ子	女	G	ス ク ー ル コ ー デ ィ ネ ー タ ー
谷 合 明 雄	男	G	四 谷 中 学 校 校 長
山 本 宣 子	女	G	四 谷 中 学 校 副 校 長

この委員を中心に、年間5回の協議会を設定し、研究の内容・方法等、細部に亘りご検討いただいた。

この経緯の中で組織の問題点、研究内容の焦点化等について意見・指摘があった。学校運営協議会の在り方について、その都度葉養会長に助言を頂きながら進めてきたが、「信頼される学校づくり」「質の高い学校づくり」に向けての協議の方向性がまだ明確にしきれていない実態であった。1年次は学校運営協議会の在り方について検討の途上であったため、2年次も引き続きこの点の研究を進める。

また、分科会による研究活動では、7時間目の地域講師導入等の学校支援の多様化、これまで表面化していなかった生徒による地域活動（ボランティア活動等）の顕在化、漢字検定教室等々、多くの成果が生まれた。その一方で各分科会が活動を進める中で学校との関わりや活動内容・方法について、どの分科会が何について取り組むか、焦点化し整理する必要が出てきた。そのため、第4回協議会后、分科会組織について、分科会のリーダーによる臨時会議を行った。その結果、2年次は分科会の組織を業務内容により整理・統合し、支援部・連携部・学校評価研究部の三つに改編し、校内組織との協働を強めていくこととした。

2 各分科会の活動内容

(1) 第1分科会 学校支援

1 取り組みの内容

- ・学力向上
- ・地域の教育力の開発・活用
- ・連携教育を視野に入れたかかわり・支援

2 活動の経緯

10月6日<第1回分科会>

取組の内容についての現状について整理。課題について話し合いを行い、学校より出された数学の習熟度別授業の課題について、学習支援を行うことに決定する。

10月7日<学習支援ボランティアの募集開始>

チラシを作成し地域、保護者に呼び掛け、集まるか懸念されたが17名の協力を得られた。体験授業日を2日間設けた。

11月5日<1年数学：学習支援ボランティアの活動開始>

11月5日<小中連絡会に出席>四谷中学校

1年数学の授業参観、支援を行いその後の全体会、数学の分科会に出席。小学校の先生方の意見を聞くことができた。

12月12日<第2回分科会>

先生、分科会委員、ボランティアで意見交換会を行った。3年生からの要望を検討し3年生についても学習支援を行うことになった。

1月15日<3年数学：学習支援ボランティア活動開始>

2月13日<花園小学校研究発表会・算数授業参観>

2月13日<反省会>

全員に記録用紙を配布し、生徒の様子、生徒の様子から言えること等を記載してもらった。内容については来年度の活動に活用する。

3 具体的な取り組み

①学力向上

<数学学習支援ボランティアの活用>

小中連携教育でも、最も重要視されたのが第1学年の数学であった。小学校の算数が数学に変わると、とたんに苦手意識を持つ生徒が増えるというアンケート結果がある。負の数の導入と文字の導入は、多くの生徒にとって大きなハードルとなるが、それを越えさせるために、7校時の数学は有意義な時間となる。しかし、一部の生徒には一対一による人の援助も必要であった。

そこで、学力向上を目指す第1分科会では、この7校時の数学に、地域のボランティアを活用することを考えた。中学校1年の数学であれば教えることができるという地域ボランティアは多く、また、地域ボランティアがいることで苦手意識のある数学に取り組める生徒もいるはずである。そしてスクール・コーディネーターが地域に呼び掛けボランティアを集めた。10数名のボランティアが集まり、活動が始まった。

<地域ボランティアの目指すもの>

第1学年の7校時の数学は、2学期から習熟度別クラス編成が行われ、3クラス100名程度の生徒を、習熟度別4クラスに編成し直した。「探求クラス」「発展ク

ラス」「標準クラス」「基礎クラス」というクラス分けで、「基礎クラス」には約20名の生徒が集まった。

7校時の授業は30分間でプリント学習が主体である。生徒はクラス別の問題に取り組む。担当教師が机間指導し、解いた問題が正解していれば丸をつけて回る。生徒は間違った問題を正解するまで何度でも挑戦するという形をとった。「探究クラス」の生徒は意欲的に取り組み、間違った問題に対しても何度でも挑戦し正解するまで必死になっていた。これこそが「探究クラス」と銘打たれる所以である。

しかし、「基礎クラス」のモチベーションは低い。自分一人では正解に行き着くことができない問題があるからだ。9月の初旬は、学年の数名の教員だけで「基礎クラス」について、生徒に対応していたが、教師の助力を必要とする生徒が多すぎた。そして9月末より地域ボランティアの登場となった。この地域ボランティアは生徒達にも好評であった。生徒2～3人に一人のボランティアがつくことで、誰もが必要な時に助言をもらえた。

第1回目のボランティア参加による7校時に、ボランティアの方々と反省会を持った。地域のボランティアの方々も、生徒達が一所懸命数学の問題に取り組む姿勢にやりがいを感じるという感想が多かった。その反面、「生徒の数学を分かるようにさせたい」という思いから「どう指導したらよいのか」という質問が多く出た。自分の指導法が正しいのか不安になったのである。そこで、第2回目からは、問題と答えだけではなく解説もていねいにつけることにした。それがあれば、全員が同じ指導法のもとに助言ができる。問題も一週間前には地域ボランティアの方々にFAXで届けることとなった。

だが、この7校時でのボランティアの方々には、分からない問題の指導よりも、『できたことに対して褒めてあげること』に重点を置いてもらうように頼んだ。基礎クラスの生徒は、自分に対して自信のない生徒が多い。教え込むことよりもやればできるんだという自信をつけさせることが、この7校時での最大の目標となった。これこそが教師ではなく、地域ボランティアにこそできる最大の利点であると考え。自信こそ、今後へつながるもっとも大きな力になるのである。

<第3学年での7校時の活用>

この地域ボランティアが軌道に乗った2学期後半、第3学年からも地域ボランティアの要請があった。受験をまじかに控えた生徒達に、力を貸して欲しいという切なる願いからである。中学校数学への入り口としてとらえた地域ボランティアが、高校進学という出口への活用にも大いに力を発揮できると考えたのである。

試験段階にあるこの地域ボランティアの7校時の授業への活用は、次々とその有効性をみつけることとなった。第3学年の7校時の数学でも、「基礎クラス」で大きな助けとなった。生徒それぞれに目指す進学先があり、そのために地域ボランティアは大きな励みとなった。地域ボランティアの方々も、生徒一人一人の進路を切り開くためと、一所懸命であった。毎行行った反省会では、その日の成果や課題が次々と語られた。そして、数学を得意とする地域ボランティアで、発展クラスを受け持つ方も現れた。助けを必要とする生徒は、何も「基礎クラス」だけではない。だが、第3学年の指導は、地域ボランティアの方々には負担が大きい。問題も難しく、責任も大きいからだ。今年度は第3学年でも地域ボランティアを活用したが、地域ボランティアの方々からは、第1学年なら来年もやれるが、第3学年は厳しいという意見もあった。

今後どう活用していくかは、地域ボランティアの方々としっかり話し合い、方向性

を見極めていく必要性がある。

②地域の教育力の開発・活用

＜他教科への地域ボランティアの活用＞

地域ボランティアは、数学だけではなく、他教科でも有効なはずである。この7校時への活用として、英語も考えている。小学校から英語を学ぶ生徒も増え、英語の学力差は激しくなる一方である。それゆえ、習熟度別学習と地域ボランティアは大きく役立つはずである。また、四谷という土地柄か英語を得意とする地域住民は多い。「基礎クラス」だけではなく、あらゆるクラスへ活用できる教科だと思われる。だが、どうその力を活用させるのか。教材の開発は、英語教員にとって難しい問題である。通常の授業に加え、選択の授業に7校時の授業と様々な指導形態をとっていくことは大きな負担になる。教員の負担をあまり増やさないで活用しなければ長続きはしない。現在、英語教員に検討してもらっている。

また、国語科など他教科でも有効活用があるはずであるが、闇雲に地域ボランティアの負担を増えさせるのも問題である。まずは、数学科と英語科でじっくりと取り組んでいきたいと考えている。

＜学校支援の状況＞

学校支援分科会の取り組みは「学力向上」としての取り組みを行ってきた。今年度は学校支援者として授業支援、行事支援、部活支援、生徒の心の育成支援、地域協働学校関連支援者ののべ人数は1164名となっている。(表1参照)

地域の声が行き交う学校がコミュニティ・スクールであり、年々地域や保護者の方の学校への支援者は増加している。このことはコミュニティ・スクールへ向けた取組があつての成果である。今後へ向けた課題としては、次の内容が指摘できる。

- ・ボランティア希望者への機会をつくり、実数を増やす。
- ・効果的な活用
- ・ボランティア活動の環境整備
- ・ボランティアの意識向上と教員の負担の軽減

③連携教育を視野に入れたかかわり・支援

今年度は第1回の分科会で現状のまとめを作成した。四谷地区は学校、スクール・コーディネーター、PTA等で小中の連携が進んでいる地区である。学校では小中連絡協議会、四谷地区校長、副校長会があり、PTAは小中で活動する八校会があり、歓送迎会、卓球大会、ソフトボール大会、教育に関する活動を実施し、地域スポーツ・文化クラブについてもPTAが主として活動をしている。スクール・コーディネーターについても連携が図れており、小学校のコーディネーターは年間を通して中学校の教育活動に協力をしてくれている。また、地域人材の情報交換や紹介もしている。

11月5日の小中連絡協議会には委員が数学の分科会出席し、2月13日に行われた花園小学校の研究発表会に数学学習支援ボランティアの方々が算数の授業参観を実施した。今後どのような視点で取り組むことができるのかが課題である。

4 成果と課題

取り組み内容として、できることは何かということで、学力向上についての活動を主にしてきたが、活動内容の検討と他の分科会と共通理解を図ることが必要である。また、活動を学校評価項目へ繋げるしくみづくりが課題である。

平成 20 年度四谷中学校・学校支援集計表

(表 1)

項 目	延べ人数	内 訳
授業支援	110	合唱指導：声楽家 4・アジアジュニアスポーツ：着付け・茶道 5・いのちの教育 4・戦争体験 1・四谷に生きる 4・落語・浪曲 3・藍染 3・セーフティ教室 食育 20 (講演：食の大切さ・麻婆豆腐調理実習・和食の基本朝食作り・夕食作り・お弁当づくり・テーブルマナー) 環境教育・年金教育・四谷地区学習発表会：着付け 新苑学級 20 (農作業体験・もちつき会・朝ランニング花いっぱい運動・お米の話)・合唱コン：審査員・楽器運搬 5 薬物乱用防止 10・防災訓練 17・道徳授業公開 10・
行事支援	78	入学式 10・運動会 40・合唱コン 8・学習発表会 10 卒業式 10
部活支援	350	野球部 200・バレー部 80・卓球部 50 バドミントン 20
ふれあいサポーター	150	ふれあいルーム当番・教育相談連絡会・ほか
地域協働学校推進 モデル校関連	476	・学校運営協議会・リーダー部会 80 ・学校支援分科会 110 小中連絡協議会 5 数学ボランティア 85 ボランティア委員会 13 花園小学校研究発表会授業参観 7 ・健全育成・安全分科会 80 ボランティア活動 40 ・スポーツ・文化分科会 186 コミュニティクラブ 180 (漢検教室・弦楽教室・茶道教室・料理教室 四谷子どもフェスタ) ミニコンサート 6 ・学校評価研究分科会 20 学校評価集計 20
合計	1164 名	

*この他に地域での学習では保育実習、職場体験を実施し、地域や保護者の協力を得ています。

(2) 第2分科会 健全育成・安全分科会

1 分科会の内容説明

本分科会は地域協働学校推進モデル校として「学校と地域(コミュニティ)との連携」という研究テーマを進めるため、地域協働学校推進モデル校事業部の一つとして設置された。中でも下位テーマの「連携教育を視野に入れた四谷地区におけるコミュニティの現状及びその位置け」を受けて立ち上げられたものである。また、学校教育のめざすいわゆる「知」「徳」「体」の「徳」の内容を担当する分科会という位置づけも担っている。

上記の研究目的に向けての研究実践として、本分科会は「地域ボランティア活動を通じた生徒・学校と地域団体との連携」に取り組んだ。これは生徒・学校と地域団体との相互のアウトプットとインプットという関係につながるものとする。本分科会が生徒・学校と地域団体とのコネクターとなって、連携の推進役となり、さらにその実践活動を通して生徒の徳性を育む活動をめざすものである。

それに向けて、学校内においては教職員と生徒の組織化及び生徒への啓発活動、また地域に向けては地域団体との連絡・調整及び広報活動が活動の具体的な柱である。

2 取組の経過と例

本校では、以前よりボランティア委員会が開設され、地域のボランティア活動に参加し実績を積んでいた。本分科会の活動の原型は、そのボランティア委員会によるところが大きい。ただその活動の多くは、地域団体からの要請を受け、随時活動するという形態をとっていた。また活動に参加する生徒も、中心的に活動する生徒はいるものの、呼びかけに応じて単発的に活動するというものであった。

担当する教員も熱心な一部の教員であり、学校全体が認知し組織的・計画的にボランティア活動を行っている状態とは言い難い面があった。

本分科会では年度当初に地域団体の担当者と相談を重ね、活動計画の検討を行った。その際に地域の主催する行事に、学校としてどのような参加形態が可能かを協議した。またその行事に参加することの意義と、本校のめざす研究目的との整合性を図ることに努めた。

学校内の組織化を進めるにおいて、まず教職員に対して以下のような方策を講じた。まず活動目的、年間活動計画・活動内容を提示し、活動への理解と協力を要請した。次に職員会議で全校体制で取り組むことを確認した。さらに参加可能なボランティア活動を選択してもらい、積極的な参加状況を作ることを心掛けた。

生徒については、1年生を活動メンバーの中心的存在とした。これは3年間を見通して生徒を育成していくことを踏まえて計画した。2・3年生については、任意の参加形態とした。その中で特に、2年生の生徒については、昨年度のボランティア委員会のメンバーがおり、実際の地域での活動ではリーダー的役割を担ってもらうことを期待した。4月当初に生徒に活動目的、年間活動計画・活動内容を提示し参加の希望を募った。ここで、2・3年生は任意の参加としたが、1年生については、活動の中心メンバーとして、また今後のボランティア活動を担う生徒として、1名1回以上の地域でのボランティアへの参加を原則とした。

また徳性の育成をめざした「道徳授業地区公開講座」にも取り組んだ。これも地域協働学校推進モデル校の研究に則した道徳授業地区公開講座の内容を検討した。特に地域との連携という視点から大幅な構成の見直しを行った。青少年育成会の代表との相談を進め、地域ボランティアとの関連

を重視しながら、道徳の授業構成を立案した。

9月11日(木)、5・6校時に各教室・体育館で実施。テーマを「郷土愛」とし、5校時には各教員や地域の方を講師とした道徳授業を展開。6校時は地域の方の講演、生徒による地域でのボランティア活動の紹介、地域の方を司会としたボランティア活動別の分科会、プリントによる学習のまとめ、などを実践した。参加者は本校全生徒・本校教職員・地域の方48名であった。

以下に本年度実施したボランティア活動の活動月日・名称・場所・参加者数・内容などを表にまとめた。

ボランティア活動実践

活動日	活動名称	活動場所	参加生徒数	備考
4月26日(土)	あしなが共同募金	四ツ谷駅	1年…5名 2年…5名 計10名	
6月8日(日)	本塩町みこし担ぎ	四谷本塩町周辺	1年…1名 2年…9名 計10名	盲人職能センターで補助も行う。
6月21日(日)	緑の羽根募金	四谷三丁目周辺	1年…8名 2年…8名 計16名	
7月2(水) ～4日(金)	七夕飾り	本校	1年…21名	地域センターなどに短冊を置き、地域の方に記入してもらう。
7月12(日)	四谷第六幼稚園こども祭り	四谷第六幼稚園	1年…7名 2年…8名 計15名	イベントスタッフ
7月28(月) ～30日(水)	若葉高齢者住宅での納涼祭	若葉高齢者住宅	1年…2名 2年…6名 計8名	高齢者の方のお世話
10月4日(土)	赤い羽根募金	四谷三丁目周辺 四ツ谷駅周辺	1年…23名 2年…6名 3年…2名 計31名	
10月12日(日)	四谷大好き祭	四谷広場	1年…10名 2年…5名 計15名	イベントスタッフ

活動日	活動名称	活動場所	参加生徒数	備考
10月26日 (日)	四谷文化祭	四谷地区センター	1年…6名	イベントスタッフ
11月3日(月)	四谷子どもフェスタ	本校体育館・校庭	1年…1名 2年…4名 計5名	イベントスタッフ
11月6日(木)	花いっぱい運動	本校・四谷小周辺	1年…7名 計7名	花の苗の植え付けと 四谷小付近の設置

生徒参加数 1学年…91名。2学年…51名(のべ人数)。3学年…2名。
計144名 (のべ人数を含む)

3 成果と課題

ア 成果

(ア) これまでのボランティア活動をより学校教育活動の中に位置づけることができた。

本校にはこれまでボランティア委員会が設置されていたが、学校教育活動の中に十分位置づけられていたか、という点では不十分な面もみられた。本年度は多くの活動を実施することができ、改善が図られたと考える。

(イ) 1学年を中心に生徒を組織的に活動へ参加させることができた。

生徒にボランティア活動の内容・計画を事前に知らせ周知させる事で参加意識を高め、その上で参加ボランティアの希望調査を行った。そして活動別のグループづくりと責任者などの組織づくりを通して、生徒の組織的な活動が行えた。

(ウ) これまで以上に学校と地域の関係団体との連携した活動を行った。

これまでも多くの地域団体との連携を行ってきたが、この実践を通してより計画的な活動が行えた。特に青少年育成会や地域センターとは、連携の活動を通して相互の信頼関係が深まったと捉えている。

(エ) 地域との連携を重視した道徳授業地区公開講座を実施した。

道徳授業地区公開講座には、多くの地域関係者の方に携わっていただいた。とりわけ、全体会での講演や分科会での司会については地域の視点から、生徒は日頃の授業では得難い内容を学ぶことができた。

(オ) 道徳授業地区公開講座や地域でのボランティア活動を通しての徳育の充実が図れた

道徳授業地区公開講座では、地域に生かすボランティアの意義を学び、また地域の方から、これまでの活動への感謝と今後の活動への励ましをもらい、生徒は達成感と充実感を感じ、地域貢献へのモチベーションが高められた。またボランティア活動場面でも、生徒は多くの地域の方の励ましの言葉等を受け、地域の温かい支援を感じ、地域に対する愛情を感受できた。

イ 課題

(ア) 本校の教育目標及び経営方針から見たボランティア活動の計画・内容の吟味

本校の教育目標及び学校長の経営方針を基に本校の教育活動が行われている。よって本分科会の活動も、教育目標・経営方針の枠組みの中で行われるべき活動と考える。この視点にたって、本分科会の行うボランティア活動の意義・内容・形態・実施時期等を再検討する必要がある。

(イ) 地域の関係団体との連絡調整のあり方の再検討

本年度は主に本校 PTA 会長を窓口として、地域の関係団体との連絡調整を行った。来年度は本校のスクール・コーディネーターなどとも密に相談を重ね、より多くの関係団体との連携を計画する必要がある。その際には上記(ア)の課題を押さえて計画することが大切である。

(ウ) 広報活動のさらなる充実

本年度は PTA 広報部を中心に PTA 広報紙や教務部発行の広報誌などを活用して、本分科会の広報活動をおこなった。しかし、この広報活動では保護者・学校関係が周知の対象となり、広く地域への広報活動としては十分に機能し得なかった。よって今後はより地域を対象とした広報活動を充実させる必要がある。

(エ) 教員の組織的な活動の活性化

年度当初の組織作りで、本校がこれまで行ってきたボランティア活動をもとに教員の分担等を行ったが、本年度は新規の活動内容も多く、十分には対応しきれなかった。また活動日の設定と教員の勤務日等との関係も検討が必要と考える。

(オ) 次年度の参加生徒の確認と参加形態・活動日の再検討

1年生には全員に1回以上のボランティア参加を原則とした。これにより参加機会を与えることで、ボランティア活動への動機付けと参加意識の向上という成果はあった。しかし、希望する活動への参加を原則としたため、内容による参加生徒数の偏りが見られた。また、ボランティア活動日と生徒のスケジュールとの調整が困難な例が見られた。

(カ) 道徳授業地区公開講座の意図する目的等と本校の取り組みの再検討

学習指導要領による道徳の目標・項目及び本校の道徳教育の目標・年間指導計画、また都教委のめざす「道徳授業地区公開講座」の目的から考えて、本分科会の実施した道徳授業地区公開講座の目的や内容が適切であったか、再検討の必要があると思われる。

(キ) 1年目の活動をふまえた、2年目の研究課題の設定

本年度の活動を振り返り、本研究のテーマに合致した活動か否かを検討する。そして、その検討を踏まえて、来年度に向けての活動内容の構築を行う。

(3) 第3分科会 文化・スポーツ

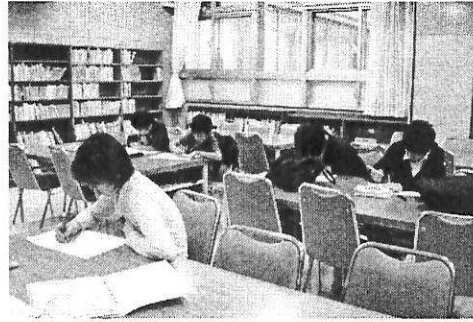
第3分科会では、文化・スポーツ事業を推進する分科会として、地域・保護者による放課後支援活動を行っている。この分科会で重点を置いているのは、「四谷中学校コミュニティ・クラブ」である。平成19年度に区の総合型スポーツ文化クラブ構想で発足させ、保護者、PTA 経験者を含む地域の方12名の協力で企画、運営されている。また、本校部活動では指導者として卒業生を含む地域の方14名にご協力いただいている。

1 四谷中学校コミュニティ・クラブ通年活動報告

<漢検教室>

年3回の漢字検定受検のために国語科の森田先生のご協力で事前学習教室を実施。今年度は合計25回開催。2月の第3回漢字検定では、本校を準会場として64名受検、46名合格した。受検の1ヶ月前から週1回の勉強会、直前の1週間は連日過去問題で練習をした。この教室が重点としていることは、地域の大人もチャレンジ精神と一緒に勉強することにある。生徒、保護者、地域の大人と一緒にプリントを練習し、森田先生に添削指導を受ける。先生が忙しい時は、スタッフが添削指導をする。励ましの言葉をかけてくれる地域の大人がいることは、生徒にとって心強いことである。

次年度の目標は、生徒の受検意欲を高めて参加者を増やし、本校の目標である学力向上に寄与することである。



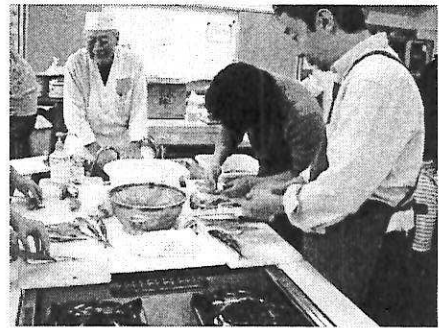
<弦楽教室>

現在、小学生2名、中学生15名の登録があり、音楽科の伊藤先生の協力と音大卒業生の指導で月に3~4回水曜日放課後実施。年1回ミニコンサートで演奏披露。

2 特別イベント報告

<魚料理教室> 12/6(土)

生徒は本校家庭科部中心に8名、保護者、地域、教職員12名で合計20名の参加があった。地域の鮮魚店関係者6名が各テーブルに一人ずつ入り丁寧に指導していただき、生徒も大人も魚に取り組む姿はとても真剣であった。地域の方を講師として迎え、学校で生徒と大人が共に学ぶことを目的とする四谷中コミュニティ・クラブらしい活動を実践することができた。



<子どもフェスタ> 11/3(月)文化の日

四谷中学校区地域スポーツ文化協議会主催で四谷中学校を会場として実施。四谷地区

の小中学校とスポーツ交流会の各団体がそれぞれの企画を持ち寄って子ども達に楽しんでもらうイベント。四谷中学校は、「ミニトレイン」「ロボット広場」「手芸コーナー」「弦楽ミニコンサート」で参加。

<茶道教室> 3/5(木)

学習発表会当日にふれあいルームにて茶道教室を実施。講師の先生の指導で御点前とお抹茶の飲み方を体験した。会場は同時に「ふろしき包み」の展示と和紙作品の装飾で、和のおもてなしを演出した。

<平成20年度 四谷中コミュニティ・クラブ実績報告>

事業内容		月日		回数	対象	参加人数(延べ人数)		
						中学生	小学生	合計
弦楽教室		5/21、28、6/5、11、18、 7/9、16、8/27、9/3、10、17 10/8、15、22、29、 11/5、19、26、12/3、10、17 1/14、21、29、2/4		25回	小学生	41	10	51名
					中学生	58	12	70
						44	8	52
						51	12	63
						36	0	36
事業内容		月日		回数	対象	参加人数	合計	
漢検教室	第1回	検定日	6/7	25回	中学生	65	74	
		勉強会	4/30、5/22					
		直前勉強会	6/2、3、5、6					
	第2回	検定日	10/18		小学生	13	69	
		勉強会	8/27、9/10、10/6		中学生	50		
		直前勉強会	10/14、15、16、17		大人	6		
	第3回	検定日	H21年 2/7		小学生	9	64	
		勉強会	12/17、1/14、19		中学生	47		
		直前勉強会	1/26 2/2、3、4、5、6		大人	8		
手芸、 ロボット 工作教室	10/22		1回	中学生	30	30		
四谷子どもフェスタ	11/3		1回	幼児	30	270		
				小学生	116			
				中学生	40			
				大人	84			
料理教室	12/6		1回	中学生	8	20		
				大人	12			
茶道教室	3/5		1回	中学生	48	72		
				大人	24			

平成20年度四谷中学校部活動報告

部活動名	活 動 報 告	地域の関わり
バスケットボール	<ul style="list-style-type: none"> ・春季大会 女子3位 ・夏季大会 女子3位 ・秋季区民大会 女子3位 	卒業生コーチ1名
バドミントン	<ul style="list-style-type: none"> ・春季大会 団体3位 ・夏季大会 団体3位 ・新人戦 団体3位、ダブルス1位、3位 シングルス2位 	保護者コーチ1名
硬式テニス	<ul style="list-style-type: none"> ・選手権大会 男子シングルス 2ブロック2位 → 都大会出場 ・都総体 団体 2ブロック 男子3位女子2位 → 都大会出場(女) ベスト16 ・新人戦 男子シングルス、ダブルス 2ブロック3位 → 都大会出場 	
野 球	<ul style="list-style-type: none"> ・夏季大会 準優勝 ・選手権(夏季)大会 3位 ・秋季大会 3位 ・区大会 3位 ・区総体 優勝 	夏合宿の手伝い 地域コーチ3名 保護者コーチ5名
サッカー	<ul style="list-style-type: none"> ・新人戦出場 ・日曜の午後に活動を始めて練習頑張っています。 	地域コーチ1名
卓 球	<ul style="list-style-type: none"> ・新人戦 団体戦3位、個人戦8位 ・月金練習しています。 	地域コーチ1名
バレーボール	<ul style="list-style-type: none"> ・夏の研修大会(8/31)では区で2位になりました。 ・新人戦 4位 ・メンバーの一部が障害者バレーの大会でボランティア。 	地域コーチ1名
美 術	<ul style="list-style-type: none"> ・講師の吉村先生が木曜日に指導。 	
英 語	<ul style="list-style-type: none"> ・8/22に英語学芸会に出場し、ナイスパフォーマンス賞をいただきました。 	
理 科	<ul style="list-style-type: none"> ・東京都理科学研究発表会(2009年1月)都大会にて優秀賞。 	
家 庭 科	<ul style="list-style-type: none"> ・お弁当コンクールに応募し、2グループが都大会に出場。 ・都大会1位及び4位 ・全国大会優秀賞 	
パソコン	<ul style="list-style-type: none"> ・学習発表会でタイピング大会実施 ・PC部1年間の活動内容、学校紹介の動画作成 	
吹奏楽	<ul style="list-style-type: none"> ・四谷大好き祭り(毎年) ・新宿コースプラスフェスタ、生徒演奏発表会 四谷音楽祭、各種発表会に向け練習に励んでいます。 	

(4) 第4分科会 学校評価研究

趣 旨 学校が地域協働型へと転換する上で、教職員の自己評価をはじめとする外部評価（学校関係者評価）や第三者評価は、教育活動をチェックする仕組みの機能を従来の成果主義とは別に、両者の調和のとれた学校マネジメントが要求される。今年度の本分科会は、教育課題を具現化するための調査と、今後の調査のあり方、内容の検討及び試行を目的とした。

1 組織

伊藤 憲弘 (学校)	酒井ふさ子 (スクール・コーディネーター)
野口はるね (PTA 副会長)	菊池里智子 (PTA 副会長)
儀賀 恭子 (PTA 副会長)	月岡 恵 (P 1 年学年代表)
戸室栄里子 (P 2 年学年代表)	田島 澄子 (P 3 年学年代表)
小林美佐子 (ふれあいサポーター)	作本 幸秋 (育成会)

2 実施計画：

日 時		内 容	場所
1	5月28日(水) 15:00～17:00	①年間計画及び活動の趣旨確認 ②第1回調査内容の検討	図書室
2	6月12日(木) 15:00～17:00	調査実施内容確認	図書室
	7月 3日(水) 7校時	保護者・地域に配布 ①生徒調査実施 ②教員調査実施	
3	7月14日(月) 15:00～17:00	評価まとめ	特活室
4	8月20日(水) 10:00～12:00	評価結果配布準備 ①保護者・地域 ②教職員 ③学校運営協議会委員	特活室
5	9月24日(水) 15:00～17:00	学校経営方針、第2回調査内容検討	特活室
6	12月22日(月)	保護者・地域配布	
7	1月23日(木) 15:00～17:00	①学校経営方針調査まとめ ②第2回調査結果まとめ	
8	3月初旬 3月24日(水) 15:00～	①第2回調査結果公表(保護者) ②学校運営協議会提示	CR

地域協働学校推進モデル校を受けての基本構想を、学校・保護者・地域社会の三者で構成協議していく上で、＜学校づくり＝地域づくり＞の視点で、児童・生徒を育てる学校・家庭・地域の融合化への取組と捉え、共通理解を図り段階に分けて調査を実施していくことにした。

第1回 評価分科会協議内容

1 生徒の現状

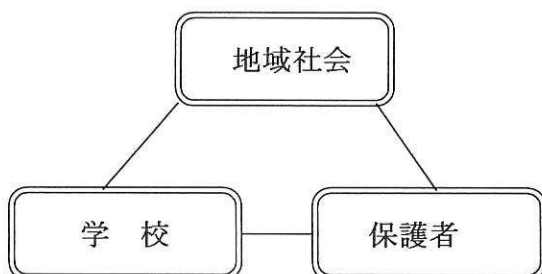
塾・習い事（本校生徒は87%）の日常は、家庭と学校の二つの空間と肥大化したマスメディアの情報空間に心を奪われ、家でTVゲームやファミコンなどの一人遊びの現状がある。一方、家庭や社会の教育機能の低下も課題となり、社会性や規範意識の希薄化や自立の遅れも懸念されている。本来、家庭や社会で担うべき躰も学校教育の場に持ち込まれ、学校は、制度疲労を起こし、本来の教育機能を果たせなくなっている。

地域社会は学校と家庭を結ぶ通り道にしかなくない。
①遊ぶ仲間
②遊び時間
③遊ぶ空間
の3つが見受けられなくなっている

地域行事への参加や地域ボランティア参加等の年間計活動画を作成し、地域の方々と触れ合う場を意図的に設定し実施する。

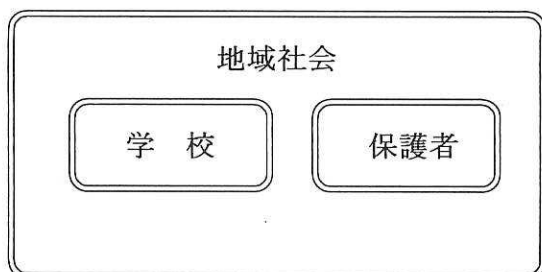
2 学校と家庭と地域の関係

ア 従来の関係



三者の関係に協力はあるものの、責任の押し付け合いも少なくない。

イ 連携・融合の関係



融合の関係とは、三者が補い合って、おおらかに児童生徒の育成に取り組める組織。

例) 躰は家庭の問題とせず学校や地域でも実践していく必要がある。

協力から連携へ、連携から融合へと発展させる

協力の状況は
連携の状況は
融合への意識は

<学校だけでは解決できない課題の山積>

3 四谷方式（メソッド）の確立

児童生徒・教師・保護者・地域の方々が、都市型コミュニティ構築の過程で「共に学び」「共に育ち」「共に生きる」学校及び地域づくりを目指す

P D C Aのサイクルの活用

P = 計画

D = 実践

C = 評価

A = 修正・再実践

★教育ボランティア（学校教育のあらゆる場面で）の活用

各教科・四谷学・部活動・学校行事・道徳の時間等への参加

保護者・地域の参加

①地域の専門家

専門的な知識や技術を持つ保護者や地域の方

②学習支援者

教科の指導助言・TTとしてのボランティア

③課外活動支援者

趣味や特技を生かしたボランティア

家庭や地域の色々な人・もの・ことと、ふれあう時間と空間を意図的に設定し、協働の活動や学習を通じて、共に喜びを積み重ねていく参画型の取組

地域にある、地域立一貫校
= 幼保・小・中一貫のカリキュラムを持つ学校

- ★学ぶことの本来の意味
- ★働くことの意味と社会参加
- ★生き甲斐の追求

フリーターやニート等を社会的に容認せざるを得ない現状はなぜなのか

学校・家庭・地域の大人が答えを求められている時代

4 新しい価値を生み出すために

例)

- ①円滑なコミュニケーションをとる力
- ②課題を見つけ解決策を考えようとする力
- ③責任を持って最後までやり遂げる力
- ④他人を思いやり優しい愛情を注げる勇気や感性
- ⑤人生に展望を持ち生き甲斐を追求しようとする力

どのように取り組むことが望ましいのか

「信頼される学校」づくりのための、生徒・保護者・地域住民への調査には、教育活動全般を数値で示し、改善された度合いが指標となる側面と、多様な学校への期待を掌握しつつ、その一つ一つに応える教職員の資質の向上や学校経営・運営等、学校教育に対する満足度で示される側面の二つがある。今年度は、学校関係者評価の改善を第三者評価を視野に入れながら、数値による改善度と今後に生かす資料収集に当てる。

第1回 調査内容と評価結果（抜粋）

各種教育活動について、下記の内容で教職員・生徒・保護者及び地域のそれぞれに、①学校の教育目標・目指す生徒像について、②学校生活について、③授業について、④先生方について、⑤学級経営についての視点で調査した。

4：とてもよく当てはまる 3：どちらかといえば当てはまる
2：どちらかといえば当てはまらない 1：まったく当てはまらない

A：第2学年生徒、B：第2学年保護者、C：教員

	%表示			
	4	3	2	1
A 先生方は、四谷中学校の教育目標や目指す生徒像等についてよく知らせてくれる。	19	42	26	13
B 学校は、教育目標や目指す生徒像等を分かりやすく伝えている。	25	55	18	2
C 学校の教育目標や目指す生徒像等を十分理解して保護者、生徒に伝えている。	63	37	0	0

	4	3	2	1
A 学校教育目標や目指す生徒像等を意識して行動している。	10	46	35	9
B 学校教育目標や目指す生徒像等の具現化を積極的に図っている。	14	56	28	2
C 学校教育目標や目指す生徒像等の実現に学級、学年、学校全体で積極的に取り組んでいる。	63	25	12	0

	4	3	2	1
A 生徒の思いや願い要望に応えた教育活動が展開されている。	17	34	38	11
B 学校は、保護者、地域の思いや願いに応えた教育活動を展開している。	21	63	15	1
C 生徒や保護者、地域の思いや願い、要望に応えた教育活動を実践している。	25	75	0	0

	4	3	2	1
A 学校の雰囲気はよく、楽しく落ち着いた学校生活を送っている。	14	36	28	22
B 学校の雰囲気はよく、生徒達は明るくいきいきとしている。	22	53	24	1
C 学校が落ち着いた雰囲気で、いきいきとした学校生活を送れるよう、教育活動全般にわたり、工夫、改善している。	75	13	12	0

	4	3	2	1
A 先生方は、保護者や来校者に対して、丁寧で誠実な対応をしている。	15	43	27	15
B 先生方は、生徒や保護者、来校者に対して、誠実な対応をしている。	33	53	13	1
C 保護者や来校者への対応や電話の対応など、丁寧に誠実に行われている	75	25	0	0

- A 授業が分かりやすいよう、いろいろと工夫してくれる。
- B 先生方は、授業を分かりやすくしたり、意欲的に取り組んだりできる工夫をしている。
- C 各教科の指導内容、指導方法、指導形態の工夫、改善に努めている。

	4	3	2	1
生徒	23	35	31	11
保護者	12	54	33	1
教師	71	29	0	0

- A 担任の先生は、学級の様子を生徒や保護者に伝える工夫をしている。
- B 学年・学級の様子について、通信の発行などでよく知ることができる。
- C 学年・学級の様子について、保護者に平素からきちんと伝えている。

	4	3	2	1
生徒	23	33	32	12
保護者	24	64	6	6
教師	25	75	0	0

- A 学級は楽しく、まとまりもあり、担任の先生との信頼関係も深まっている。
- B 子どもは、楽しく充実した学校生活を過ごし、担任の先生との信頼関係もある。
- C 生徒との信頼関係に基づき、一人一人を大切に学級づくり、学級経営が進められている

	4	3	2	1
生徒	16	43	27	14
保護者	27	51	20	2
教師	50	38	0	12

- A 担任の先生の学級作りの考えや方針がよく分かる。
- B 担任の学級作りの考えや方針などがよく分かり、共感できる。
- C 学級づくり、学級経営の考え方や方針は、具体的で分かりやすいものとなっている。

	4	3	2	1
生徒	24	32	28	16
保護者	19	54	26	1
教師	63	25	0	12

地域協働学校推進モデル校を推進していく上で、四谷地区29町会の各町会長に、平成20年度学校経営方針を提示し、方針の理解と地域が望む中学生像に関する調査を実施した。

学校経営案方針についての調査結果（抜粋）

1 学校の教育目標

人間尊重の精神を基盤とし、確かな知性と創造性を身につけ、心豊かで実践力のあるたくましい生徒を育成する。

- 勉学に励み、新しい文化を創造する人
- 気品ある人間性をそなえ、すすんで社会に貢献する人
- 心身ともに健やかで、たくましく生きる力を持つ人（今年度重点目標）

2 生徒の実態（生徒の一般的な傾向として）

地域での生徒の実態をお聞かせ下さい

●・通行人の多い所では自転車のスピードをゆるめて走ってもらいたいと思うことがありました（野球のユニフォーム姿でした）。●最近街にあまり見かけなくなった。私の隣の四谷中学生は野球に夢中になって頑張っている。●登校下校時に3人の生徒さんの姿を見掛けますが会うときちゃんと挨拶はします。私自身とても気分が良くなります。3人ともとても純粋な生徒さんである。下校してからは外の出る事は殆どない様な気がする。●登校時下校時に垣間見る生徒において楽しく明るい生徒に写ります。募金活動にも参加してほほえましくも思います。中には自転車通学やコンビニでの買いぐいなど見られる時もありますがまだまだあどけなさがあるように感じます。●お祭り、町会バス旅行、ラジオ体操、避難所訓練、歳末夜警等で中学生を見かけない。●中学生はやさしい、少し弱々しい感じ。●四谷地区商店会連合会主催の「四谷大好き祭り」には、交通・警備等への協力で感謝致します。四谷中学校の生徒さんは、おおむね節度あると思います。●学校、社会のルールを守れる事の出来る生徒。●歩きながら物を喰っている姿は良くない。●当町会の本年貴在校生は2人（最近卒業生は平成20年2人、19年1人）と少なく一般的傾向とは云えないかも知れませんが、従来から消防少年団、少年野球チーム、花園神社例大祭等で親の背を見ながらの活動が見受けられます。●当町会では本年6月に消防団卒業生を表彰しました。

3 目指す生徒像及び本年度の重点目標

地域が望む中学生像をお聞かせ下さい。

●私達の育つ時とちがい、社会情勢も複雑化し、その中で学校生活の共同化と、個人個人の志向（私考）を伸ばすのは、大変難しいと思います。親を気にして子供達の教育以外にも先生方は大変だと思います。●真面目な中学生を望みますが、今の世の中そうはいかない、人に優しく親にも優しい人間でいいのではないのでしょうか。●勉強、運動、時々町での買物をしたら、地域の方と交流を持つ事も必要だと思います。●学ぶ心を忘れず人に対する思いやりを心がけて欲しい。優しいようで難しいことです。●地域行事に参加してほしい。外部空間で過ごす時間を増やしてほしい。●一層の地域活動への協力をお願いします。●知能、技能、体力を習得し思いやる心。●学校の目標が良い。●大局的には貴校の「目指す生徒像」や教育委員会の教育目標のとおりだと思います。地域（町会）的には町会青年部に積極的に参加し独自の活動を大事にしつつ町会の未来に持続発展できる原動力になって欲しいと思います。

4 特色ある教育活動の展開

御意見をお聞かせ下さい

●学校教育以外にピアノ、ギター、バイオリンその他音楽や体育系と専門的なことを習いその他の人たちとの格差も大変だと思う。●勉強にいそしみ科学者になる夢を持ち友達と意見交換が出来る人間。●ゴミゼロデー地域の方と一緒に活動参加している事は大変良い事だと思います。地域の人も喜んでおります。とくに年配の方が、若返るとの事です。●中学で教える事の量が多すぎる様な気がする。それぞれのチガイを大切に教育。●①オールBオール3の基本は続けて欲しい。（素晴らしい案です）②文化系の充実も図って欲しいです。（昔は美術の時間には子供達が公園などでしばし写生をしている姿を見かけました。キャラクター的なマンガ的な絵を描く子が多く自分の想像性に乏しい。）③各町会ゴミゼロデー参加とか？・・・出来る範囲。大変効果があると思います。地域にめざすのに地味ですが実のあるものです。●各人の個性を伸ばせる環境が必要かと思えます。●自主、自立、個性を伸ばし生きる力を付け多くの人とかかわりをもつ。●内容が高度で、キャリア教育、特別支援教育、地域協働学校モデル校の立ち上げ等、学ばないと実態の見えないところがあるので外れになるかもしれないが、●①と②は、矛盾する部分があるように思われる。オールB以上は一般的に望ましいが（ノーベル賞受賞者の中には稀にそうでない人もいる）、特異の才能を育てることも大事

5 地域協働学校推進モデル校の立ち上げと学校・家庭・地域社会の一体化した指導にかかわって

御意見をお聞かせ下さい

●少子化の時代です。地域の人達と一つになって物事を話し合っって良い方向に進んでほしい。●出来る事なら成るべく地域との交流つながりを持つべきだと思います。●1つの案ですが、地元出身の教職員導入配属など教育委員会の試みが必要があるのでは。●地域の事業所、商店主、卒業生（定年）に資金・人材援助要請。●地域と学校とPTAとがそれぞれの役割を認識した上で実施してほしい。●中学生ともなると親や地域の人とのかかわりが少なくなっているの、まず、親子との会話そして町や商店会の事業に参加を。●地域協働学校は活動目標の明確化と持続できる組織体制づくりが大事と思われる。その意味で現在の地域団体に次のような状況があるとすれば、学校側の体制が十分であっても真に機能する地域窓口の確保は困難で地域的な温度差も生じると思われる。●①町会は会員の親睦を目的とした通常業務に終始していないか。●協働事業への関心と協力度合が不明。●②協働事業体として期待される現組織の活動が硬直・形式化していないか。●協働事業への柔軟な協力度合が不明。●モデル校の立ち上げが急務であれば地域的な温度差覚悟で最低限の協働事業体を組織し運営することになるのでしょうか。

6 その他

御意見をお聞かせ下さい

●生徒達がのびのびと学校が楽しい場所で暖かみのある大人になる時であると思います。●先生達は昔と違って子供達の考え胸の内を聞いて慎重に育成してほしいと思います。●もう少し誰が読んでも分かりやすい文面にして頂けたら助かります（町の声）相手の立場になって。伝わりにくいように思えます。●合唱コンクール、子供フェスタに地域の町会長（29町会）の顔が2～3人しか見えないのはさみしい。広報不足か、時間設定が悪いのか？もう少し地域に配慮を●多くの人との出会いを大切に。●町会長等は老人が多いのでこの様なアンケートは良く解りません。むしろPTAや区議の人達にお聞きになったらと思います。貴校の経営方針を自信を持ってやれば良いと思います。●この度は高度・困難な経営方針を策定され敬服しております。これからが更に大変だと思いますので精力的に頑張ってくださいと思います。

